

## <研究ノート>西村茂樹における「文明国家」への道 ： 戦略としての道徳、希望としての帝室

著者	筑後 則
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	56
ページ	25-50
発行年	2001-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10716">http://hdl.handle.net/10114/10716</a>

## 「研究ノート」

# 西村茂樹における「文明国家」への道

——戦略としての道徳、希望としての帝室——

## 筑 後 則

### はじめに——「儒者西村茂樹」という視座

日本近代思想史における西村茂樹の位置については、今からは半世紀前の一九五三年に上梓された家永三郎「西村茂樹論」<sup>1)</sup>が一つの定説となってきた。家永は西村について「全思想体系に於いて必ずしも左程大きな価値をもつとは云へない」が「一面きはめて伝統に執着する保守的な態度をとりながら、他面はきはめて批判的な近代的な物の考へ方を示している」ことに関心を寄せ、そうした「一見相互に矛盾する思想の組合せに、明治前半期日本の社会と思想界との複雑と混乱を見る」という。また西村が「封建思想家としては元田永孚のごとく徹底的ならしめずさりとて近代思想家としても甚だ不徹底な、中途半端な思想家」に終わったのは「曾ては封建的支配者の一人たり、後には明治政府の一官僚たるに過ぎず、専ら著述講演による知識人として具体的な社会的勢力との結びつきをもたなかった西村が、その地位を危うすることのない範囲でしかもその折衷的な、頑ならぬ穩健な考へ方の

上に立つて議論」したために「統一性を欠く多面的な思想を表現するに至」らざるを得なかったと、やや同情的見解を示した。

この家永論文以後、近代日本の思想家としての西村茂樹評は半否定的または否定的なものが主である。すなわち西村は、幕末から明六社時代までは啓蒙家として近代化を先導する一定の役割を果たしたが、それが思想家西村の頂点であり、明治十年代後半から後退が始まって反動的傾向をあらわにし、二十年代以降は封建的国家主義者に逆戻りしてしまい、帯刀論さえ言い出すに至ったのだ、と。

西村の思想に最も否定的な評価を下しているのは山田洗である。山田は次のように結論した。「西村の国家道徳論においては、封建道徳がそのまま対外的な危機意識を媒介として、国家の富強と直結した。しかもそれは、単に個人の立場が十分に尊重されなかったというような程度の問題ではなく、ようやく自覚されはじめた個人の立場を根本的意識的に否定するために説かれている。そしてそのかぎりで確かに現実主義的であったと言えるかもしれ

ないが、その現実主義は国家富強の方向にだけ作用し、個人の伸長といった側面に対してはまったく閉ざされていたと結論できよう<sup>(3)</sup>。

家永―山田は、西村における思想的転回に、開明的側面と反動的側面とが同居する過渡期の思想家の一類型を見出しているのであるが、両者の論理構造は、ともに近代化（民主主義的要素に重心を置く）の価値を前提とした、近代的（＋）か反近代的（－）かという二値分析であり、それゆえに、西村茂樹という歴史的存在の裡に、矛盾と混乱、あるいは進歩から後退へという反動的ストーリーを析出することになったのであろう。

むしろ欧米の近代化論者の中に、近代化を必然であり善とする理論的前提ながらも、価値中立的な方法によって、西村の思想の（<sup>(4)</sup>）実により接近している例がある。たとえばD・H・シャイヴリーによれば、西村の道德思想は「明治社会の本質的には保守的だった性格によりよく適合」して「西洋化と土着主義的反動の中間にあつて、国力強化への一番の早道」を指し示した。また西村自身は幕末―明治期を通じて「いささかも変らずにいた」のだが「官民ともに十年、二十年の間に、西洋化の方へ方向を変えてはるかに遠く進み、しかもその後一般思潮が後向きになってくると、その思潮の一部は少なくとも、彼の進行過程の方へそれてきて交錯した」。こうして彼の活動は、結果、必ずしも自身の意に沿ったものではないにしても、權威主義国家と盲目的排外主義のイデオロギーに寄与したのだ、と。

本稿のアプローチは家永―山田の視点とも、D・H・シャイヴ

リーの方法とも異なる。本稿では西村における「一見相互に矛盾する思想の組合せ」に、その思想的限界や、一般思潮との偶然的交錯を見るのではなく、むしろ儒者西村<sup>(5)</sup>の実存的整合性を見出そうと試みた。西村は、山田が「個人の伸長といった側面に対してはまったく閉ざされていた」と指摘したように、たしかに自身を自由なる個人と規定した地点において知的活動を展開した人ではなかった。彼は儒教の徒としては、幕藩制に殉じ得ないほど原理に忠実なラジカルであり、佐久間象山の遺志を継いで「東洋道德」への確信から「西洋芸術」を積極的に受容した人である。儒者西村という視座を設定すれば、彼の思想のなかに近代的個人の視点が析出されないからといって、そのこと自体驚くには当たらないし、批判するのもあまり意味はない。むしろ西村のエートスを努めて理解し、時代的制約のなかでの彼の「論理と心意」の実相を素描し直すこと、換言すれば危機意識の中で西村が儒者・経世家として近代日本の国家・社会・国民をどのように構想し得たかを吟味することにより、西村を忌避した伊藤博文らによる明治立憲制の一面が陰面として炙り出され、同時にまた、自由民権の方向とは別の、日本近代の未発掘のオルタナティブを模索することができるのではなからうか。

西村は、言論や出版、さらには直接的な建言により藩閥政府の内政・外交のあり方と倫理性とに多くの批判を加え、あるべき国家像と国民像を提示した。体系的な富国強兵策はすでに安政三年本藩主堀田正睦（當時は正篤）に呈した「時事策」で述べている。西村が経世家・道德思想家として一貫して背負った課題は対外的

独立を磐石ならしめる国家の創出であつたが、その限りでは幕府も藩閥政府も二義的なものだった。彼は可能な限り早期に、明治維新後の国家を自立した文明国家として立ち上げようと奮闘したのである。この西村の新国家像は、修身道徳を基盤とした理念的なものという印象があるが、実際は官制・議會・民業・貿易・教育・山林治川・軍制・外交など具体的提言が豊富に伴っていた。また西村は思想的活動全般を通じて、時代状況からの限界はあるものの、実証的合理的な態度に基づいた国家観・世界観を展開しており、すくなくとも原理主義的な国家主義者ではなかった。また西村の道徳思想は、内省的なものというより、近代国家の体裁と内実とを確立させるための原理・基盤として構想されたものである。儒者・経世家の思想は、つねに治国平天下への動機に淵源した。思想が政治的・経済的・社会的実践を離れて、もっぱら個人の精神世界で展開されるという事態は、西村には考えられないことだったろう。

西村は近世から近代への、いわば思想の汽水域で活動し、その航跡は思想家というより「儒者」のそれであるのだが、「儒者西村」が尊皇敬幕の洋学者から啓蒙思想家へ、そして国家主義を唱える道徳思想家へとその相貌を変えたかに見える航跡は、強い対外的危機意識とその反射としての内国的危機意識のうえに描き出されたものである。西村の思想全体は、まず第一にこの強烈な危機意識の歴史の所産なのである。以下本稿では、彼のエトスを発現させることとなった危機意識の態様を見た上で、彼の目指した国家像とそのための道徳論の戦略性、帝室の位置づけなどを検

討しつつ、「儒者西村」の史実的実存に迫りたい。

## 一 危機意識の態様

### 1 対外的危機意識

嘉永六年米国使節ベリーが来航して開国を迫ったとき、西村茂樹は老中外国掛の阿部正弘に「上閣老福山侯論海防書」を上書し、その前書きに「外患の義は天下一統の患い」であるから「凡此国中に生を享け候者は、上下貴賤之差別なく」力を尽すべきであり「愚臣微賤とは乍申、日本国人の一人に候間」献芹の微衷を申上げる、と書かなければならなかった。陪臣から幕閣への直言という幕藩制秩序を侵犯せざるを得ない危機意識がここに表明されている。

海防論本題では「地球に属し候万国の形勢」について「凡そ人の国を侵略仕候国々は、国富み兵強く、政令簡明にして、士民勇決に候故、自然と強勢に相成」っているが「自守り候国は、国驕り備情り、政令繁冗にして、優柔不斷を以て事を取行い候故」と万国対峙の形勢に対応できない日本国の現状が問題であると述べる。そしてさらに「欧羅巴諸国は地を擴むるを以て主と致し、亜細亞、阿弗利加の地、大抵は其属国と相成、近世に至り候ては、亞墨利加に独立の合衆国出来、各々四海を囊括するの志を抱き居候由」と欧米諸国による世界分割の脅威がいよいよ急迫していることを指摘している。今日はこうした侵奪行為から日本国を防禦するために「富国強兵を以て専務と仕候御時節」であり、それには「東照宮御政令と少々御変通不被遊候ては」異賊防禦の御備は

できないので、開国して積極的に交易を行い、国富を増し強兵の基を固め、国の独立を維持するべきだと結論した。<sup>9)</sup>

「地球に属し候万国」の一つとしての日本、貴賤上下とも「日本人の一人」として危機に対処すべき事態。この国際認識と日本人意識を明確にしたとき、西村は図らずも幕藩制の思想的枠組みを踏み越えていたのである。

大政奉還直後の明治元年四月「輔相岩倉具視卿へ上りし書」<sup>10)</sup>を西村は次のように書き出した。

「傭宇内の形成を洞観仕り候に、歐羅巴の諸国盡く遠略を務め富強を志し、日月の照す所、其帆影の至らざるの地無之、天下の要地は盡く歐羅巴人に據有せられ、天下の物産は盡く歐羅巴人に占領せられ、亜細亜、阿弗利加、墨墨利加、澳大利の（北墨米利加の合衆国は、歐羅巴人種に御坐候間、此内に算入不仕候）四大洲の諸国、大抵其制驭を受け、或は其属国となり、或は其寄藉の地となり、其内自立の国も許多有之候得共、其權利は盡く歐羅巴人の手に落候間、其実は宇内殆んど歐羅巴人の有となり候も同様の事と奉存候」。

そして西村はこう続けた。

「亜細亜州の如きは、古より聖賢英雄の並ひ生ずるの地にして、他の三州と同じく歐羅巴人の制驭を受候は、何共遺恨千万の事と奉存候」。ここにも「欧羅巴人の制驭」に対抗する理念の磐石として、儒教的なものに希望を託した西村の立場が看取できる。

西村は明治六年に森有礼、福沢諭吉、中村正直、加藤弘之らと共に明六社を結成して啓蒙的言論活動を開始し、また文部省に編

輯課長として出仕する。西村はその後明治十九年『日本道德論』講演までの間、欧米諸国への脅威論を声高に叫んでいないが、これは「近代的な物の考へ方」<sup>11)</sup>を示した時期というより、焦眉の急である国家独立の基、国民統合の基本的方向を「儒学と洋学の間」に模索していた時期であつたし、同時に顯官華族には新国家建設の同伴者としての信をかううじて保持していたからであろう。そうして彼は、明治十八年十二月の内閣制度発足には、国際的な危機状況と国内的危機に対処する国民統合へのビジョンが明確に打ち出されることを期待した。が、伊藤内閣の欧化政策に西村は深く失望した。西村はこう回想している。

「明治十八年十二月の改革は、維新以来の大改革なれば、国中目を拭いて新政を觀、余も又大に望を新政に屬せり、然るに伊藤内閣の新政は、法律、制度、風俗礼儀一々は欧米に模倣し、専ら外面の文明を装ひ、外人を優遇し、舞踏会、仮装会、活人画会等其他外国の遊戲を行ひ、務めて其歡心を求め、本邦古来国家の根柢たりし、忠孝節義武勇廉恥等の精神は棄て、顧ざるもの、如し」。

西村はここで対外的危機感を再び鮮明にし、明治十九年十二月帝国大学の講義室で公衆に向かつて『日本道德論』を講演し、そのなかで日本国の置かれた国際的危機状況を訴えながら、道德による国民統合の必要を広く呼びかけるのである。

「近年西洋諸国、何れも力を東洋に伸さんとするの意あらざるはなし、仏蘭西の安南を取り、英吉利の緬甸を滅ぼし、兼て朝鮮の巨文島を略し、徳逸の南洋諸島を吞併し、露西亞の地を南方に

擴めんとするは、十目の共に視る所なり」、「此の如き危殆の地に立ちて其独立を保たんとするは、決して容易なことに非ず、世の論者偏に文明の風俗を喜び、一日も早く之に遷らんと欲するもの多し、文明開化は固より希望すべきことなれども、国ありてこそ文明開化も要用なれ、若し其国を失ふときは文明開化も施す所なかるべし。故に今日の勢にては、全国の民力を合て本国の独立を保ち、併せて国威を他国に輝かすを以て必須至急の務と為さるべからず」<sup>(13)</sup>。

対外的危機意識と国内的危機意識とがここに収斂したのは「儒者西村茂樹」の必然的な帰結であつた。

## 2 内なる危機―「妄論」をめぐる

西村は『日本道德論』において対外的危機のみならず内なる危機についても同時に指摘した。国を誤る元は無知文盲、宗教の迷信、自己過信、己が学びたることの偏信、文明の過信という五つの妄論であるが、なかでも最も危険なものが「文明を過信するの妄論」であり、それは「今日上等の知識を具へたる者の発する妄論にして、政府の高官となり又は学士の名譽を得たる人にも亦免れざる者」があり、人を誤り導く危険が非常に大きいという。さらに、そのなかでも特に「親ら西洋諸国を遍歴し、其盛大を觀て之に眩惑し、判断撰択の力を失ひ一も二も悉く西洋に倣はんとする者にて、即ち目より眩惑せられて其妄論を發する者」がその筆頭である。これは岩倉遣欧使節団に参加した高官たちを指しているのは明白であり、そのトップはもちろん伊藤博文であつた。こ

のように『日本道德論』は伊藤内閣の外交・内政両面への政策と倫理性への強い批判を含んでいたため、「新政を誹謗する言」として伊藤を激怒させたのは当然であつた。また、そもそも国家を自然史的過程の生成物とし、統治機構を蒸氣機関の如きものとして機械論的に把握する「進んでいる」政治人間伊藤博文らは、すでに前代の儒教的倫理から解放された政治意識・国家観を有しており、「修身治国非二途論」に普遍性を見出そうとした西村との間には根本的な乖離が存在したのである。

さらに明治二十二年四月、政府の条約改正案の内容が洩れて英國のロンドン・タイムズ紙に掲載されると、西村は条約改正案が「国家百年の禍を為」との認識から、黒田総理大臣、伊藤樞密院議長、各閣僚宛てに「条約改正に付き建言」を呈し、改正案で危惧する問題として外人に「内地雜居を許し、土地所有權を与ふる」と「大審院の判事を登備する」との二件を指摘した。

建言中、西村は顯官たちに対して「自己の経験何程富みたりとも、歴史の経験には及はざることを知り、自身の才能何程勝れたりとも、一己の私見には蔽はるゝ處ることを知り、目前の便利を顧みずして百年の大計を考へるべきであり」「彼印度土耳其埃及安南緬甸の覆轍は決して他國の事として等閑に之を視るべからざるなり」と述べている。

国家を主導すべき顯官貴族が欧米に「目眩し氣奪はれ、本邦固有の精華を棄て、百事則を欧米に取らんと」し、また民間凡庸の徒も「惟彼國の華麗侈大と、工芸技術の巧妙とに驚歎し、身心俱に彼に屈下するの傾」となる、「妄論」に端を発するこのような

事態は、西村にとって内国的危機の本質をなすものであった。

### 3 危機の全体性

ところで、西村の危機意識は、政治的・軍事的なものだけではなく、社会・経済・文化の全体的危機として把握されていた。西村において西欧の脅威とは、国家と社会のあらゆる領域に及ぶ衝撃波である故に、空間的防禦にとどまらず、国家理念、産業、教育など国家システムと民族性全体の内発的改革による対抗が目指されたのである。彼が『日本道徳論』に続いて『国家道徳論』を著し、政官の現状を批判し国家政策の全領域における改革を具体的に提起した理由はここにあった。

『国家道徳論』は言う。

「今世界各国の状を見るに、支那と北米合衆国とは文政にして、欧州の諸国は大抵武政なり（中略）欧州の諸国は何れも狼貪虎視各牙を磨し爪を鋭にし、皆他国の釁を伺ひてこれに乗せんと欲す<sup>1)</sup>。そもそも「欧州諸国が強大富盛なるは、決して自身の動侯のみを以て之を得たる者に非ず、何れも他国の地を侵し、他国の財を奪ひ、以て今日の富強を致したる者なり、其侵奪の事業は今日に至りても息む者に非ず、益々東方に向ひて其欲望を伸張し、愚なる者は欺きて其財を取り、弱き者は撃て其地を掠め、地球上に国土のあらん限りは之を侵奪せざれば止まざらんとす。此の如き虎狼の国に対し、尊崇と畏怖とのみを以て己が国を守らんと欲す、識者は之を何とか言はん<sup>2)</sup>」。にもかかわらず邦人は、自国は美も醜も他国に如かずとし、先祖以来の旧風遺教を棄てて少しも

顧惜していない。愛国心が浅く、中には道徳を愚弄する学士すらいる。西洋にはキリスト教を愚弄する学士などいないにも拘らず！

西村の目に映る国家社会の現状は、中人以上の改革者が西洋文明の美を称し、万人和すの状態である。知識道徳、治国、経済、衣食住まで悉皆西洋風となり、ひたすら旧物を廃してただ新を求むものの如くである。しかし西洋文明は優れているが十全ではなく、欠点も多々ある。逆に、われわれの習慣もことごとく醜というわけではない。彼は、国民の蒙を啓きこの事理を自覚させたい。西欧の侵奪を受けないためには、国民の知徳勇によつて国の独立を保たなければならぬのである。侮られない国、畏敬される国にならなければならぬ。それには国民道徳の確立が不可欠であり、軍艦・大砲・詩歌秀麗だけでは危ういのである。問題は軍事的脅威だけでなく、国民の知力・経済力・結合力を含む「危機の全体性」に根ざしているのであるから。

明治初期に西村を啓蒙家として活動させたエトースは、その後の日本弘道会創立へ、さらに『日本道徳論』『国家道徳論』の著述へと向かわせたのであり、そこに思想的後退や反動化を見たのでは、西村の実存に迫ることはできないし、ひいては近代前期の思想家たちのエトースを理解する道を閉ざしてしまうのである。

## 二 西村茂樹の国家像

### 1 国家と国民

儒者西村茂樹は、前章で確認したように内外への強い危機意識

に促され、国政への批判や建言を通じて国家のあるべき姿、歩むべき道を提起した。日清戦争を挟んで著した『国家道德論』と『続国家道論』は官を辞した西村がその考えを率直に表出した書である。両書を中心に彼の描いた国家ビジョンにいよいよ迫ってみよう。

そもそも西村は国家と国民をどう捉えていたのか。彼によれば、まず国家とは「政治上より其国民の全体を称するの名」<sup>19)</sup>である。社会が国民の生活上の結合であるのに対し、国民は政治上の結合ということである。そして国民とは「華土族平民の別を論ぜず、渾て我 天皇陛下の臣民を指すの語」<sup>20)</sup>である。すなわち彼が国民と言うとき、そこには一般民衆とともに元勳をはじめ政府高官や上層軍人ら国家支配層も、すなわち「一君」以外の人々すべてを含めていたわけである。また国民は、封建變じて郡県となり、四民の区別を廢してこれを等しく國民としたのであるから「他の三民も士族と同じく国の治乱安危を負担せざるべからざること、なり、四民の地位責任、大に封建時代に異なる者」<sup>21)</sup>となった。このような国民とは明らかに近代国民国家の成員としての国民であるう。

そして国家と国民との関係は次のようであるという。

「国と云ふは土地と民とを合せたる名にして、土地のみにては国を成すこと能はず。国の高崇鄙劣貧富強弱は皆國民の爲す所に於て、國民の知徳高ければ其國の品位貴く、國民の知徳低ければ其國の品格低し、若し國民の知徳甚しく欠乏する時は、其國は或は危亡に陥ることあり、貧富虚弱も亦之に同じ、富国と言へるは

國民の富めるなり、強国と云へるは國民の強きなり、貧国と云へるは國民の貧しきなり、弱国と云へるは國民の弱氣なり、國民が國家に大關係を有すること此の如し」<sup>22)</sup>。

このように西村は維新後の日本国家を「國民」を主体とする国家として構想したのである。しかもわが國家は「今日文明開化を以て國家の國是と成さんは、國民全体の同意して決して異議なき所」<sup>23)</sup>である。そして、その國家運営の枠組みでは立憲政体を支持した。立憲政体では、税制を例にとれば「立憲政体となりしより、国税は国会（帝國議會）之を議定し、地方税は府県会之を議定し市町村税は市町村之を議定することと爲り居れば、一二長官の私見を以て擅に租税を賦課増減することを得ず、此の如きは實に立憲政治の美事と云ふべし」と有司専制への歯止めが期待できる。しかし帝國議會の現状を見れば「其弊を言へば、或は政黨の偏見より、或は多數議員の政府に阿諛するより、意外の情税を人民に課することなしとも言難し。此の如きは其時に當りては如何とすること能はず」と心もとないところがある。そこで、迂遠ではあるが「唯教育を盛んにし、人民の知徳の増進するを待つの外に良法あることなし」という結論が導き出されたのである。<sup>24)</sup>

つまり西村は、知徳が高く富強なる國民を創出し、その國民が立憲政体を通じて、有徳富強な國家を築き上げるという道筋を理想としたのであり、その基盤としての知徳の増進を願った。そのとき政府の教育行政は知育に偏重しているので、自らは徳育の充実に尽力してその不足を補おうとしたわけである。



## 2 尊王愛国

西村は、西欧に対峙し得る国民統合を実現するにあたり、「尊王と愛国」は日本において特殊に一体不可分なものと考えた。が、それは情緒的尊皇家の場合とは異なり、彼の構想する有徳富強な国家への前提として意味づけられていた。彼は愛国について次のように語る。

「本国とは己が出生し居住する国にして、英吉利人なれば英吉利を本国として、支那人なれば支那を本国とす、其本国を愛すると云ふは、もと人類の天性に出たる者にして、何人にも自己の出生し自己の住居せる国を大切と思はざる者はなし、此自国を大切にと思ふ心は即ち国家の存立に必要な原素にして、若し国民に此心なきときは、何れの国も成立すること能はざるなり、故に西洋諸国にても愛国心を養ふを以て国民の第一の務とせり」<sup>(25)</sup>これは愛国心、パトリオチズムの妥当性一般についての説明であり、とりたてて特異な点はない。では、本邦において、愛国が尊王と一体化するという、その論理とはどのようなものか。

西村は皇室について『国民訓』のなかで次のように言っている。

「世界の帝王国は支那を始め、大抵革命の国にして、時々其王室に変換あり、故に其王室は国と与に終始すること能はずして、若し闇弱不徳の君出るときは、或は賢者に其国を譲らざる可からざることあり、或は英傑の人出て、其王室を滅ぼして己れ之に代ることあり、是を以て其王室を尊戴するの心も自ら純然ならざる者あり」。これに比して日本の場合は「独り我邦は 天祖 天孫

より一系の 皇統連綿として千万世に至るも変換あることなし、現今の日本の国民は 皇室と三千年來の君臣にして、其名分の正しきこと、恩義の深きこと、世界に其比類を見ず」<sup>(26)</sup>

要するに世界の各国は、多くは革命の国か共和政治の国なので尊王と愛国は二つの觀念に分裂している。愛国者が王を殺すこともあり、尊王家が国に不利益なことをすることもある。昔から皇室と国家が一体化しているわが日本帝国は世界無比の国体なので——西村はこの論理を意識的に打ち出している。西村が宗教一般を、とりわけキリスト教を厳しく警戒したのも、それが尊皇愛国の国家像を根元から突き崩す恐れがあるからである。

このような西村の言説は、明治初期における彼の西欧的近代国家観がもはや影をひそめてしまった証拠として批判されてきた。<sup>(27)</sup>確かに西欧的国家観は後退したかも知れない。しかしそれは近代的国家観の後退を直ちには意味しない。おそらく西村の真意は以下の叙述に集中的に表現されているのである。

「天祖天孫以来、皇室の鞏固なること既に幾千年、近年立憲政体の定まるに及び、皇室益々其鞏固を加ふ、臣民たる者宜く欽定憲法を恪守して、各其職分を盡さざるべからず、若し立憲政体を濫用して禍を 皇室に及ぼさんとする者あらば、真に不忠の臣と云ふべし、余は永く此の如き臣民の出ざらんことを願ふなり」<sup>(28)</sup>

立憲政体を濫用して欽定憲法を恪守せず、その職分を尽さず、結果として皇室に——当然、皇室と不可分なる国家そのものにも——禍を及ぼす恐れのある「臣」とは誰か。不忠の民でなく「不忠の臣」と言っているところに注目すべきである。『国家道徳論』

『統国家道德論』の全体を通読すれば、これは立憲政体の頂点に立つ元勳とその周辺の高官たちを含んだ指摘であることは明白であろう。

こう考えると事態は少し違ってくる。西村の「尊王愛国」とは、個人の伸長を抑圧するものと言う以前に、むしろ藩閥政府の専制を牽制しつつ「徳治国家」への道を希求する論理として主張されたのが実相ではないだろうか。

### 3 徳治国家

西村は、道德は国家にも適用されると考える。道德とは当時にあつても一般に個人および公人が一身を処す道＝倫理のことであつたから、彼の発想では、あきらかに国家に擬似的な人格を想定、有機的な意思決定機構とみなしていたのである。『国家道德論』以下における国家の道德とは、国家運営や外交までを含む「治国平天下の道」<sup>30</sup>であると言う。つまりは政治家・官僚による政策決定・遂行における規範や倫理の問題である。

西村の主張では、政治家は道德的でなければならぬし、そもそも道德的でなければ政治家たる資格がないのである。『日本道德論』以来何度も繰り返された、現今の国政が善美でないのは政府高官の座に不道德な人間が多いからである、という主張は、明治六社時代の「修身治国非二途論」<sup>31</sup>いらい晩年まで不変だった。たとえば以下のように。

「維新の元勳の諸侯は多くは功名の臣なるを以て政治の根元道德に在ることを知らず、唯法律と智術とを以て国家を治むべしと

謂ひ、専ら之を行ふこと十数年今に至りて猶良善の效果を見ず、今日仮令法蘭西徳逸に勝るの法律を作り比斯馬克ビスマルク額拉斯エラースに過ぐるの智略を振ふも、大臣たる者、其身の素行修まらず、官省の間には賄賂潜かに行はれ、官吏は鬻縁を以て進み、上下俱に名利の為に其心を錮するが如きことあらば、国家の隆盛を望むも決して得べからざる也」<sup>32</sup>。

内閣大臣は立憲政体において天皇を輔弼する責任を負い、国の安危治乱は、ほとんど内閣大臣の人物如何に関係する。だから大臣たる者は全身を挙げて国家に尽さなければならない。「其身を検束して放蕩奢侈の行あるべからず、常に礼節を守り鄙劣の挙動あるべからず、其交はる所を慎み、姦商猾賈の類を近づくべからず、勤勞儉節にして官民の模範と為らざるべからず」<sup>33</sup>。西村の言葉はさらに続く。私党を採用すべからず、己の喜怒哀情で人を進退すべからず、官禄に恋々たるの醜態あるべからず、さらに大事に望んで動揺すべからず、事変に應ずるの機敏なかるべからず、時勢を察するの智見なかるべからず、国民を鎮圧するの度量なかるべからず。

政府高官のみならず、役所で働いている百官も安逸に堕してゐる、と西村は言う。いつも長官の顔色ばかり覗つていて、国家国民を考えて自主的に判断する者がいない。粗漏誤見多し、と。西村によれば、試験に及第した軽薄少年学士を重用する弊によつて、敦篤忠良剛毅方正の人はほとんど役所からその跡を絶つてしまった。諸官省政務の煩雜も大きな問題であるが、これは国情・民知に基づかない西洋模擬の法ゆえである。貴族院などは支配者

華族富裕者グループの政治支配の具となり、国家尊荣国民幸福を考えず私利私党の利に走っている。そしてここにも畜妾、賄賂、私党が蔓延しているのである。

こうした治世では文明の政治は覚束ない。日清戦争直後の『統国家道德論』で、ついに西村は次のように言い放つ。「現今の藩閥大臣は、政事に秕政あるのみならず、何れも其私行修まらず、姪酒に耽る者あり、賄賂に黷る、者あり、博打を好む者あり、此の如きは国民全体の風俗を乱す者にして、到底永く地位に居らしむるべき者に非ざるなり」<sup>(34)</sup>

大臣や百官に対するこのような西村の「資格要求」は理想主義に過ぎるのだろうか。西村はこれらの言葉を一般論として並べたのではない。それらは元勳らに対する批判と言うより、むしろ告発に近いものとなっている。そして、こうした危機的現実を克服するものとして、彼の国家像——徳治による国家像が描かれたのである。

#### 4 国家主義と世界主義

西村は一貫して「国家主義」を標榜し「世界主義」に疑念を持ち続けた。この態度は「国家主義者」西村への批判の論拠の一つとなってきた。たしかに西村の唱えた国家主義は民権主義と対立的であったが、戦後歴史学において否定された国権主義や超国家主義とそのまま同じものではなかった。まずは西村の「国家主義」「世界主義」それぞれの定義を確認してみよう。

西村は明治二十九年一月の日本弘道会常集会演説「世界主義と

国家主義<sup>(35)</sup>」において国家主義には二種類あると言っている。その一つは、

「尊王愛国を以て教育の骨子とし、學術工芸は世界の長を採り、以て己が短を補ひ、其外人に接するは彼の好意を以て来らば之を厚遇し、彼悪意を以て来らば之を拒絶し、外には一寸なりとも拡張すべし、内には一寸なりとも退縮すべからざるといへる精神を養ふ者なり」

というものである。ここで「外には一寸なりとも拡張すべし」と言っているが、これは領土拡張のことではなく、国際社会におけるいわゆるプレゼンス、国家としての威信や存在感の向上を指している。この主張が指し示しているのは、要するに十九世紀の国民国家システムにおける国民国家の一般的な形態である。これを仮に国家主義（A）と呼んでおこう。

いま一つの国家主義とは「維新の以前に国中に勢力を逞しくせし攘夷党の如き者」で「其見る所甚だ狭隘にして其執る所甚だ固陋なるよりして、或は自国の文物制度を以て独り他国に勝れたりとして、彼の長を採りて己が短を補ふことを知らざる者あり、或は他国の君民を仇敵視して、之に対して凶器を弄する者」であるという。「津田三蔵、小山六之助の如き者」がその例である。これを国家主義（B）としよう。西村は、世界主義者が排撃せんとするものは狭隘固陋な国家主義（B）のことで、国家主義（A）ではない、と言う。

次に、西村が理解していた「世界主義」とはどのようなものか。上記演説中、西村は当時の文部大臣西園寺公望に反論するとして

以下のように述べている。

「世界主義と云ふは元来耶蘇教より出たることにして、彼教にては世界の人類は皆天父、即ち上帝の生む所なれば、何れも兄弟の因縁ありといへる義に本づきたる者なり、此言は耶蘇教家は皆之を口にして之を以て諸国の民に説く所にして、其云ふ所を聞けば誠に博愛仁厚を主とするものの如し」

このように西村は理念としての世界主義を否定しているわけではない。しかしながら現実の世界主義は「其実際より見るときは言行全く相反し、耶蘇教を奉ずるところの国々は何れも己が国の富強を図り、常に他国を侵掠して己が疆土を拡張己が富を増さんと欲す、其の愛する所は独り己が国民と同宗教の民とに止まりて、他国の民又は他宗教の民を見るときは之を輕蔑賤侮し、或は兵力を以て之を威服せんことを務めざるはなし」というものになつていと言ふ。世界主義という語義は「世界の人民は皆平等なり」というもので、その言は公明正大のようである。しかし十九世紀の国民国家対抗の現実を認識せず唱えるとき、世界主義・博愛主義・平等主義は亡国背義の説とならざるを得ないのだ、と。たとえば今、世界主義を採つて内地雜居を許し、国内産業を國際競争にさらせば、たちどころに土地を買占められ、産業を支配されてしまい、国民の生活は破壊される。つまり世界主義は西欧經濟強国の世界的市場支配のイデオロギーだというのが、西村の認識なのである。

もともと西村は、遠い将来には世界主義の理念が、その本来の意味で浸透するときに来るかも知れない、とも言っている。この

西村茂樹における「文明国家」への道（筑後）

文脈からも西村の「国家主義」は原理主義的なものではなく、國際政治の現実認識に基礎を置いた、近代国民国家システムにおける民族国家論の範疇にあったことは明らかであろう。

## 5 不侵略国家

日清戦争は当時圧倒的多数の政治家、知識人、ジャーナリスト、民権家、地方の名望家層までが賛成し熱狂した戦争であり、西村のような反対者はきわめて少数であつた。『統国家道德論』は日清開戦の「原因」の箇所が伏字とされたが、その該当部分の内容は「往事録」にも載っており、日本の近代政治史の「非公式」な一面を生々しく証言している。

「○西隣の大國と、此のことく容易に戰端を開きたるは其故あることなり、是より先き、伊藤内閣は、数々議會の反對に逢ひ、頗る危殆に陥りしが、種々の策術を用ひて辛く其地位を保ち居たり（<sup>39</sup>）（<sup>40</sup>）（<sup>41</sup>）（<sup>42</sup>）（<sup>43</sup>）（<sup>44</sup>）（<sup>45</sup>）（<sup>46</sup>）（<sup>47</sup>）（<sup>48</sup>）（<sup>49</sup>）（<sup>50</sup>）（<sup>51</sup>）（<sup>52</sup>）（<sup>53</sup>）（<sup>54</sup>）（<sup>55</sup>）（<sup>56</sup>）（<sup>57</sup>）（<sup>58</sup>）（<sup>59</sup>）（<sup>60</sup>）（<sup>61</sup>）（<sup>62</sup>）（<sup>63</sup>）（<sup>64</sup>）（<sup>65</sup>）（<sup>66</sup>）（<sup>67</sup>）（<sup>68</sup>）（<sup>69</sup>）（<sup>70</sup>）（<sup>71</sup>）（<sup>72</sup>）（<sup>73</sup>）（<sup>74</sup>）（<sup>75</sup>）（<sup>76</sup>）（<sup>77</sup>）（<sup>78</sup>）（<sup>79</sup>）（<sup>80</sup>）（<sup>81</sup>）（<sup>82</sup>）（<sup>83</sup>）（<sup>84</sup>）（<sup>85</sup>）（<sup>86</sup>）（<sup>87</sup>）（<sup>88</sup>）（<sup>89</sup>）（<sup>90</sup>）（<sup>91</sup>）（<sup>92</sup>）（<sup>93</sup>）（<sup>94</sup>）（<sup>95</sup>）（<sup>96</sup>）（<sup>97</sup>）（<sup>98</sup>）（<sup>99</sup>）（<sup>100</sup>）（<sup>101</sup>）（<sup>102</sup>）（<sup>103</sup>）（<sup>104</sup>）（<sup>105</sup>）（<sup>106</sup>）（<sup>107</sup>）（<sup>108</sup>）（<sup>109</sup>）（<sup>110</sup>）（<sup>111</sup>）（<sup>112</sup>）（<sup>113</sup>）（<sup>114</sup>）（<sup>115</sup>）（<sup>116</sup>）（<sup>117</sup>）（<sup>118</sup>）（<sup>119</sup>）（<sup>120</sup>）（<sup>121</sup>）（<sup>122</sup>）（<sup>123</sup>）（<sup>124</sup>）（<sup>125</sup>）（<sup>126</sup>）（<sup>127</sup>）（<sup>128</sup>）（<sup>129</sup>）（<sup>130</sup>）（<sup>131</sup>）（<sup>132</sup>）（<sup>133</sup>）（<sup>134</sup>）（<sup>135</sup>）（<sup>136</sup>）（<sup>137</sup>）（<sup>138</sup>）（<sup>139</sup>）（<sup>140</sup>）（<sup>141</sup>）（<sup>142</sup>）（<sup>143</sup>）（<sup>144</sup>）（<sup>145</sup>）（<sup>146</sup>）（<sup>147</sup>）（<sup>148</sup>）（<sup>149</sup>）（<sup>150</sup>）（<sup>151</sup>）（<sup>152</sup>）（<sup>153</sup>）（<sup>154</sup>）（<sup>155</sup>）（<sup>156</sup>）（<sup>157</sup>）（<sup>158</sup>）（<sup>159</sup>）（<sup>160</sup>）（<sup>161</sup>）（<sup>162</sup>）（<sup>163</sup>）（<sup>164</sup>）（<sup>165</sup>）（<sup>166</sup>）（<sup>167</sup>）（<sup>168</sup>）（<sup>169</sup>）（<sup>170</sup>）（<sup>171</sup>）（<sup>172</sup>）（<sup>173</sup>）（<sup>174</sup>）（<sup>175</sup>）（<sup>176</sup>）（<sup>177</sup>）（<sup>178</sup>）（<sup>179</sup>）（<sup>180</sup>）（<sup>181</sup>）（<sup>182</sup>）（<sup>183</sup>）（<sup>184</sup>）（<sup>185</sup>）（<sup>186</sup>）（<sup>187</sup>）（<sup>188</sup>）（<sup>189</sup>）（<sup>190</sup>）（<sup>191</sup>）（<sup>192</sup>）（<sup>193</sup>）（<sup>194</sup>）（<sup>195</sup>）（<sup>196</sup>）（<sup>197</sup>）（<sup>198</sup>）（<sup>199</sup>）（<sup>200</sup>）（<sup>201</sup>）（<sup>202</sup>）（<sup>203</sup>）（<sup>204</sup>）（<sup>205</sup>）（<sup>206</sup>）（<sup>207</sup>）（<sup>208</sup>）（<sup>209</sup>）（<sup>210</sup>）（<sup>211</sup>）（<sup>212</sup>）（<sup>213</sup>）（<sup>214</sup>）（<sup>215</sup>）（<sup>216</sup>）（<sup>217</sup>）（<sup>218</sup>）（<sup>219</sup>）（<sup>220</sup>）（<sup>221</sup>）（<sup>222</sup>）（<sup>223</sup>）（<sup>224</sup>）（<sup>225</sup>）（<sup>226</sup>）（<sup>227</sup>）（<sup>228</sup>）（<sup>229</sup>）（<sup>230</sup>）（<sup>231</sup>）（<sup>232</sup>）（<sup>233</sup>）（<sup>234</sup>）（<sup>235</sup>）（<sup>236</sup>）（<sup>237</sup>）（<sup>238</sup>）（<sup>239</sup>）（<sup>240</sup>）（<sup>241</sup>）（<sup>242</sup>）（<sup>243</sup>）（<sup>244</sup>）（<sup>245</sup>）（<sup>246</sup>）（<sup>247</sup>）（<sup>248</sup>）（<sup>249</sup>）（<sup>250</sup>）（<sup>251</sup>）（<sup>252</sup>）（<sup>253</sup>）（<sup>254</sup>）（<sup>255</sup>）（<sup>256</sup>）（<sup>257</sup>）（<sup>258</sup>）（<sup>259</sup>）（<sup>260</sup>）（<sup>261</sup>）（<sup>262</sup>）（<sup>263</sup>）（<sup>264</sup>）（<sup>265</sup>）（<sup>266</sup>）（<sup>267</sup>）（<sup>268</sup>）（<sup>269</sup>）（<sup>270</sup>）（<sup>271</sup>）（<sup>272</sup>）（<sup>273</sup>）（<sup>274</sup>）（<sup>275</sup>）（<sup>276</sup>）（<sup>277</sup>）（<sup>278</sup>）（<sup>279</sup>）（<sup>280</sup>）（<sup>281</sup>）（<sup>282</sup>）（<sup>283</sup>）（<sup>284</sup>）（<sup>285</sup>）（<sup>286</sup>）（<sup>287</sup>）（<sup>288</sup>）（<sup>289</sup>）（<sup>290</sup>）（<sup>291</sup>）（<sup>292</sup>）（<sup>293</sup>）（<sup>294</sup>）（<sup>295</sup>）（<sup>296</sup>）（<sup>297</sup>）（<sup>298</sup>）（<sup>299</sup>）（<sup>300</sup>）（<sup>301</sup>）（<sup>302</sup>）（<sup>303</sup>）（<sup>304</sup>）（<sup>305</sup>）（<sup>306</sup>）（<sup>307</sup>）（<sup>308</sup>）（<sup>309</sup>）（<sup>310</sup>）（<sup>311</sup>）（<sup>312</sup>）（<sup>313</sup>）（<sup>314</sup>）（<sup>315</sup>）（<sup>316</sup>）（<sup>317</sup>）（<sup>318</sup>）（<sup>319</sup>）（<sup>320</sup>）（<sup>321</sup>）（<sup>322</sup>）（<sup>323</sup>）（<sup>324</sup>）（<sup>325</sup>）（<sup>326</sup>）（<sup>327</sup>）（<sup>328</sup>）（<sup>329</sup>）（<sup>330</sup>）（<sup>331</sup>）（<sup>332</sup>）（<sup>333</sup>）（<sup>334</sup>）（<sup>335</sup>）（<sup>336</sup>）（<sup>337</sup>）（<sup>338</sup>）（<sup>339</sup>）（<sup>340</sup>）（<sup>341</sup>）（<sup>342</sup>）（<sup>343</sup>）（<sup>344</sup>）（<sup>345</sup>）（<sup>346</sup>）（<sup>347</sup>）（<sup>348</sup>）（<sup>349</sup>）（<sup>350</sup>）（<sup>351</sup>）（<sup>352</sup>）（<sup>353</sup>）（<sup>354</sup>）（<sup>355</sup>）（<sup>356</sup>）（<sup>357</sup>）（<sup>358</sup>）（<sup>359</sup>）（<sup>360</sup>）（<sup>361</sup>）（<sup>362</sup>）（<sup>363</sup>）（<sup>364</sup>）（<sup>365</sup>）（<sup>366</sup>）（<sup>367</sup>）（<sup>368</sup>）（<sup>369</sup>）（<sup>370</sup>）（<sup>371</sup>）（<sup>372</sup>）（<sup>373</sup>）（<sup>374</sup>）（<sup>375</sup>）（<sup>376</sup>）（<sup>377</sup>）（<sup>378</sup>）（<sup>379</sup>）（<sup>380</sup>）（<sup>381</sup>）（<sup>382</sup>）（<sup>383</sup>）（<sup>384</sup>）（<sup>385</sup>）（<sup>386</sup>）（<sup>387</sup>）（<sup>388</sup>）（<sup>389</sup>）（<sup>390</sup>）（<sup>391</sup>）（<sup>392</sup>）（<sup>393</sup>）（<sup>394</sup>）（<sup>395</sup>）（<sup>396</sup>）（<sup>397</sup>）（<sup>398</sup>）（<sup>399</sup>）（<sup>400</sup>）（<sup>401</sup>）（<sup>402</sup>）（<sup>403</sup>）（<sup>404</sup>）（<sup>405</sup>）（<sup>406</sup>）（<sup>407</sup>）（<sup>408</sup>）（<sup>409</sup>）（<sup>410</sup>）（<sup>411</sup>）（<sup>412</sup>）（<sup>413</sup>）（<sup>414</sup>）（<sup>415</sup>）（<sup>416</sup>）（<sup>417</sup>）（<sup>418</sup>）（<sup>419</sup>）（<sup>420</sup>）（<sup>421</sup>）（<sup>422</sup>）（<sup>423</sup>）（<sup>424</sup>）（<sup>425</sup>）（<sup>426</sup>）（<sup>427</sup>）（<sup>428</sup>）（<sup>429</sup>）（<sup>430</sup>）（<sup>431</sup>）（<sup>432</sup>）（<sup>433</sup>）（<sup>434</sup>）（<sup>435</sup>）（<sup>436</sup>）（<sup>437</sup>）（<sup>438</sup>）（<sup>439</sup>）（<sup>440</sup>）（<sup>441</sup>）（<sup>442</sup>）（<sup>443</sup>）（<sup>444</sup>）（<sup>445</sup>）（<sup>446</sup>）（<sup>447</sup>）（<sup>448</sup>）（<sup>449</sup>）（<sup>450</sup>）（<sup>451</sup>）（<sup>452</sup>）（<sup>453</sup>）（<sup>454</sup>）（<sup>455</sup>）（<sup>456</sup>）（<sup>457</sup>）（<sup>458</sup>）（<sup>459</sup>）（<sup>460</sup>）（<sup>461</sup>）（<sup>462</sup>）（<sup>463</sup>）（<sup>464</sup>）（<sup>465</sup>）（<sup>466</sup>）（<sup>467</sup>）（<sup>468</sup>）（<sup>469</sup>）（<sup>470</sup>）（<sup>471</sup>）（<sup>472</sup>）（<sup>473</sup>）（<sup>474</sup>）（<sup>475</sup>）（<sup>476</sup>）（<sup>477</sup>）（<sup>478</sup>）（<sup>479</sup>）（<sup>480</sup>）（<sup>481</sup>）（<sup>482</sup>）（<sup>483</sup>）（<sup>484</sup>）（<sup>485</sup>）（<sup>486</sup>）（<sup>487</sup>）（<sup>488</sup>）（<sup>489</sup>）（<sup>490</sup>）（<sup>491</sup>）（<sup>492</sup>）（<sup>493</sup>）（<sup>494</sup>）（<sup>495</sup>）（<sup>496</sup>）（<sup>497</sup>）（<sup>498</sup>）（<sup>499</sup>）（<sup>500</sup>）（<sup>501</sup>）（<sup>502</sup>）（<sup>503</sup>）（<sup>504</sup>）（<sup>505</sup>）（<sup>506</sup>）（<sup>507</sup>）（<sup>508</sup>）（<sup>509</sup>）（<sup>510</sup>）（<sup>511</sup>）（<sup>512</sup>）（<sup>513</sup>）（<sup>514</sup>）（<sup>515</sup>）（<sup>516</sup>）（<sup>517</sup>）（<sup>518</sup>）（<sup>519</sup>）（<sup>520</sup>）（<sup>521</sup>）（<sup>522</sup>）（<sup>523</sup>）（<sup>524</sup>）（<sup>525</sup>）（<sup>526</sup>）（<sup>527</sup>）（<sup>528</sup>）（<sup>529</sup>）（<sup>530</sup>）（<sup>531</sup>）（<sup>532</sup>）（<sup>533</sup>）（<sup>534</sup>）（<sup>535</sup>）（<sup>536</sup>）（<sup>537</sup>）（<sup>538</sup>）（<sup>539</sup>）（<sup>540</sup>）（<sup>541</sup>）（<sup>542</sup>）（<sup>543</sup>）（<sup>544</sup>）（<sup>545</sup>）（<sup>546</sup>）（<sup>547</sup>）（<sup>548</sup>）（<sup>549</sup>）（<sup>550</sup>）（<sup>551</sup>）（<sup>552</sup>）（<sup>553</sup>）（<sup>554</sup>）（<sup>555</sup>）（<sup>556</sup>）（<sup>557</sup>）（<sup>558</sup>）（<sup>559</sup>）（<sup>560</sup>）（<sup>561</sup>）（<sup>562</sup>）（<sup>563</sup>）（<sup>564</sup>）（<sup>565</sup>）（<sup>566</sup>）（<sup>567</sup>）（<sup>568</sup>）（<sup>569</sup>）（<sup>570</sup>）（<sup>571</sup>）（<sup>572</sup>）（<sup>573</sup>）（<sup>574</sup>）（<sup>575</sup>）（<sup>576</sup>）（<sup>577</sup>）（<sup>578</sup>）（<sup>579</sup>）（<sup>580</sup>）（<sup>581</sup>）（<sup>582</sup>）（<sup>583</sup>）（<sup>584</sup>）（<sup>585</sup>）（<sup>586</sup>）（<sup>587</sup>）（<sup>588</sup>）（<sup>589</sup>）（<sup>590</sup>）（<sup>591</sup>）（<sup>592</sup>）（<sup>593</sup>）（<sup>594</sup>）（<sup>595</sup>）（<sup>596</sup>）（<sup>597</sup>）（<sup>598</sup>）（<sup>599</sup>）（<sup>600</sup>）（<sup>601</sup>）（<sup>602</sup>）（<sup>603</sup>）（<sup>604</sup>）（<sup>605</sup>）（<sup>606</sup>）（<sup>607</sup>）（<sup>608</sup>）（<sup>609</sup>）（<sup>610</sup>）（<sup>611</sup>）（<sup>612</sup>）（<sup>613</sup>）（<sup>614</sup>）（<sup>615</sup>）（<sup>616</sup>）（<sup>617</sup>）（<sup>618</sup>）（<sup>619</sup>）（<sup>620</sup>）（<sup>621</sup>）（<sup>622</sup>）（<sup>623</sup>）（<sup>624</sup>）（<sup>625</sup>）（<sup>626</sup>）（<sup>627</sup>）（<sup>628</sup>）（<sup>629</sup>）（<sup>630</sup>）（<sup>631</sup>）（<sup>632</sup>）（<sup>633</sup>）（<sup>634</sup>）（<sup>635</sup>）（<sup>636</sup>）（<sup>637</sup>）（<sup>638</sup>）（<sup>639</sup>）（<sup>640</sup>）（<sup>641</sup>）（<sup>642</sup>）（<sup>643</sup>）（<sup>644</sup>）（<sup>645</sup>）（<sup>646</sup>）（<sup>647</sup>）（<sup>648</sup>）（<sup>649</sup>）（<sup>650</sup>）（<sup>651</sup>）（<sup>652</sup>）（<sup>653</sup>）（<sup>654</sup>）（<sup>655</sup>）（<sup>656</sup>）（<sup>657</sup>）（<sup>658</sup>）（<sup>659</sup>）（<sup>660</sup>）（<sup>661</sup>）（<sup>662</sup>）（<sup>663</sup>）（<sup>664</sup>）（<sup>665</sup>）（<sup>666</sup>）（<sup>667</sup>）（<sup>668</sup>）（<sup>669</sup>）（<sup>670</sup>）（<sup>671</sup>）（<sup>672</sup>）（<sup>673</sup>）（<sup>674</sup>）（<sup>675</sup>）（<sup>676</sup>）（<sup>677</sup>）（<sup>678</sup>）（<sup>679</sup>）（<sup>680</sup>）（<sup>681</sup>）（<sup>682</sup>）（<sup>683</sup>）（<sup>684</sup>）（<sup>685</sup>）（<sup>686</sup>）（<sup>687</sup>）（<sup>688</sup>）（<sup>689</sup>）（<sup>690</sup>）（<sup>691</sup>）（<sup>692</sup>）（<sup>693</sup>）（<sup>694</sup>）（<sup>695</sup>）（<sup>696</sup>）（<sup>697</sup>）（<sup>698</sup>）（<sup>699</sup>）（<sup>700</sup>）（<sup>701</sup>）（<sup>702</sup>）（<sup>703</sup>）（<sup>704</sup>）（<sup>705</sup>）（<sup>706</sup>）（<sup>707</sup>）（<sup>708</sup>）（<sup>709</sup>）（<sup>710</sup>）（<sup>711</sup>）（<sup>712</sup>）（<sup>713</sup>）（<sup>714</sup>）（<sup>715</sup>）（<sup>716</sup>）（<sup>717</sup>）（<sup>718</sup>）（<sup>719</sup>）（<sup>720</sup>）（<sup>721</sup>）（<sup>722</sup>）（<sup>723</sup>）（<sup>724</sup>）（<sup>725</sup>）（<sup>726</sup>）（<sup>727</sup>）（<sup>728</sup>）（<sup>729</sup>）（<sup>730</sup>）（<sup>731</sup>）（<sup>732</sup>）（<sup>733</sup>）（<sup>734</sup>）（<sup>735</sup>）（<sup>736</sup>）（<sup>737</sup>）（<sup>738</sup>）（<sup>739</sup>）（<sup>740</sup>）（<sup>741</sup>）（<sup>742</sup>）（<sup>743</sup>）（<sup>744</sup>）（<sup>745</sup>）（<sup>746</sup>）（<sup>747</sup>）（<sup>748</sup>）（<sup>749</sup>）（<sup>750</sup>）（<sup>751</sup>）（<sup>752</sup>）（<sup>753</sup>）（<sup>754</sup>）（<sup>755</sup>）（<sup>756</sup>）（<sup>757</sup>）（<sup>758</sup>）（<sup>759</sup>）（<sup>760</sup>）（<sup>761</sup>）（<sup>762</sup>）（<sup>763</sup>）（<sup>764</sup>）（<sup>765</sup>）（<sup>766</sup>）（<sup>767</sup>）（<sup>768</sup>）（<sup>769</sup>）（<sup>770</sup>）（<sup>771</sup>）（<sup>772</sup>）（<sup>773</sup>）（<sup>774</sup>）（<sup>775</sup>）（<sup>776</sup>）（<sup>777</sup>）（<sup>778</sup>）（<sup>779</sup>）（<sup>780</sup>）（<sup>781</sup>）（<sup>782</sup>）（<sup>783</sup>）（<sup>784</sup>）（<sup>785</sup>）（<sup>786</sup>）（<sup>787</sup>）（<sup>788</sup>）（<sup>789</sup>）（<sup>790</sup>）（<sup>791</sup>）（<sup>792</sup>）（<sup>793</sup>）（<sup>794</sup>）（<sup>795</sup>）（<sup>796</sup>）（<sup>797</sup>）（<sup>798</sup>）（<sup>799</sup>）（<sup>800</sup>）（<sup>801</sup>）（<sup>802</sup>）（<sup>803</sup>）（<sup>804</sup>）（<sup>805</sup>）（<sup>806</sup>）（<sup>807</sup>）（<sup>808</sup>）（<sup>809</sup>）（<sup>810</sup>）（<sup>811</sup>）（<sup>812</sup>）（<sup>813</sup>）（<sup>814</sup>）（<sup>815</sup>）（<sup>816</sup>）（<sup>817</sup>）（<sup>818</sup>）（<sup>819</sup>）（<sup>820</sup>）（<sup>821</sup>）（<sup>822</sup>）（<sup>823</sup>）（<sup>824</sup>）（<sup>825</sup>）（<sup>826</sup>）（<sup>827</sup>）（<sup>828</sup>）（<sup>829</sup>）（<sup>830</sup>）（<sup>831</sup>）（<sup>832</sup>）（<sup>833</sup>）（<sup>834</sup>）（<sup>835</sup>）（<sup>836</sup>）（<sup>837</sup>）（<sup>838</sup>）（<sup>839</sup>）（<sup>840</sup>）（<sup>841</sup>）（<sup>842</sup>）（<sup>843</sup>）（<sup>844</sup>）（<sup>845</sup>）（<sup>846</sup>）（<sup>847</sup>）（<sup>848</sup>）（<sup>849</sup>）（<sup>850</sup>）（<sup>851</sup>）（<sup>852</sup>）（<sup>853</sup>）（<sup>854</sup>）（<sup>855</sup>）（<sup>856</sup>）（<sup>857</sup>）（<sup>858</sup>）（<sup>859</sup>）（<sup>860</sup>）（<sup>861</sup>）（<sup>862</sup>）（<sup>863</sup>）（<sup>864</sup>）（<sup>865</sup>）（<sup>866</sup>）（<sup>867</sup>）（<sup>868</sup>）（<sup>869</sup>）（<sup>870</sup>）（<sup>871</sup>）（<sup>872</sup>）（<sup>873</sup>）（<sup>874</sup>）（<sup>875</sup>）（<sup>876</sup>）（<sup>877</sup>）（<sup>878</sup>）（<sup>879</sup>）（<sup>880</sup>）（<sup>881</sup>）（<sup>882</sup>）（<sup>883</sup>）（<sup>884</sup>）（<sup>885</sup>）（<sup>886</sup>）（<sup>887</sup>）（<sup>888</sup>）（<sup>889</sup>）（<sup>890</sup>）（<sup>891</sup>）（<sup>892</sup>）（<sup>893</sup>）（<sup>894</sup>）（<sup>895</sup>）（<sup>896</sup>）（<sup>897</sup>）（<sup>898</sup>）（<sup>899</sup>）（<sup>900</sup>）（<sup>901</sup>）（<sup>902</sup>）（<sup>903</sup>）（<sup>904</sup>）（<sup>905</sup>）（<sup>906</sup>）（<sup>907</sup>）（<sup>908</sup>）（<sup>909</sup>）（<sup>910</sup>）（<sup>911</sup>）（<sup>912</sup>）（<sup>913</sup>）（<sup>914</sup>）（<sup>915</sup>）（<sup>916</sup>）（<sup>917</sup>）（<sup>918</sup>）（<sup>919</sup>）（<sup>920</sup>）（<sup>921</sup>）（<sup>922</sup>）（<sup>923</sup>）（<sup>924</sup>）（<sup>925</sup>）（<sup>926</sup>）（<sup>927</sup>）（<sup>928</sup>）（<sup>929</sup>）（<sup>930</sup>）（<sup>931</sup>）（<sup>932</sup>）（<sup>933</sup>）（<sup>934</sup>）（<sup>935</sup>）（<sup>936</sup>）（<sup>937</sup>）（<sup>938</sup>）（<sup>939</sup>）（<sup>940</sup>）（<sup>941</sup>）（<sup>942</sup>）（<sup>943</sup>）（<sup>944</sup>）（<sup>945</sup>）（<sup>946</sup>）（<sup>947</sup>）（<sup>948</sup>）（<sup>949</sup>）（<sup>950</sup>）（<sup>951</sup>）（<sup>952</sup>）（<sup>953</sup>）（<sup>954</sup>）（<sup>955</sup>）（<sup>956</sup>）（<sup>957</sup>）（<sup>958</sup>）（<sup>959</sup>）（<sup>960</sup>）（<sup>961</sup>）（<sup>962</sup>）（<sup>963</sup>）（<sup>964</sup>）（<sup>965</sup>）（<sup>966</sup>）（<sup>967</sup>）（<sup>968</sup>）（<sup>969</sup>）（<sup>970</sup>）（<sup>971</sup>）（<sup>972</sup>）（<sup>973</sup>）（<sup>974</sup>）（<sup>975</sup>）（<sup>976</sup>）（<sup>977</sup>）（<sup>978</sup>）（<sup>979</sup>）（<sup>980</sup>）（<sup>981</sup>）（<sup>982</sup>）（<sup>983</sup>）（<sup>984</sup>）（<sup>985</sup>）（<sup>986</sup>）（<sup>987</sup>）（<sup>988</sup>）（<sup>989</sup>）（<sup>990</sup>）（<sup>991</sup>）（<sup>992</sup>）（<sup>993</sup>）（<sup>994</sup>）（<sup>995</sup>）（<sup>996</sup>）（<sup>997</sup>）（<sup>998</sup>）（<sup>999</sup>）（<sup>1000</sup>）（<sup>1001</sup>）（<sup>1002</sup>）（<sup>1003</sup>）（<sup>1004</sup>）（<sup>1005</sup>）（<sup>1006</sup>）（<sup>1007</sup>）（<sup>1008</sup>）（<sup>1009</sup>）（<sup>1010</sup>）（<sup>1011</sup>）（<sup>1012</sup>）（<sup>1013</sup>）（<sup>1014</sup>）（<sup>1015</sup>）（<sup>1016</sup>）（<sup>1017</sup>）（<sup>1018</sup>）（<sup>1019</sup>）（<sup>1020</sup>）（<sup>1021</sup>）（<sup>1022</sup>）（<sup>1023</sup>）（<sup>1024</sup>）（<sup>1025</sup>）（<sup>1026</sup>）（<sup>1027</sup>）（<sup>1028</sup>）（<sup>1029</sup>）（<sup>1030</sup>）（<sup>1031</sup>）（<sup>1032</sup>）（<sup>1033</sup>）（<sup>1034</sup>）（<sup>1035</sup>）（<sup>1036</sup>）（<sup>1037</sup>）（<sup>1038</sup>）（<sup>1039</sup>）（<sup>1040</sup>）（<sup>1041</sup>）（<sup>1042</sup>）（<sup>1043</sup>）（<sup>1044</sup>）（<sup>1045</sup>）（<sup>1046</sup>）（<sup>1047</sup>）（<sup>1048</sup>）（<sup>1049</sup>）（<sup>1050</sup>）（<sup>1051</sup>）（<sup>1052</sup>）（<sup>1053</sup>）（<sup>1054</sup>）（<sup>1055</sup>）（<sup>1056</sup>）（<sup>1057</sup>）（<sup>1058</sup>）（<sup>1059</sup>）（<sup>1060</sup>）（<sup>1061</sup>）（<sup>1062</sup>）（<sup>1063</sup>）（<sup>1064</sup>）（<sup>1065</sup>）（<sup>1066</sup>）（<sup>1067</sup>）（<sup>1068</sup>）（<sup>1069</sup>）（<sup>1070</sup>）（<sup>1</sup>

の「往事録」記述にあるように、この戦争は大義が希薄なばかりか、甚だしい不道德な動機を内包していると見ていたからである。こうした内閣の態度は、西村の見るところ、国家および天皇への不忠であった。

明治三十年に日清戦後の「形成一変」を受けて草した『統国家道德論』に西村は「国是五条」を提起した。その内容は、

(一) 我が国家の基礎を磐石とするため、道德政体法律教育のうち、万世の帝室を戴き君臣の分を定める必緊の原資を大切に、これに欧米諸国の道德政体法律教育等を採用して我が不足を補う。

(二) 今日の弱肉強食世界にて国威を墮すことのないよう、国民の武徳を磨励する。

(三) しかし侵略を以て国是としなない。海陸の軍備は本国防衛の用に限定する。

(四) 真性の平和を以て他国と相交わり、通商等により相互の利益を為す。他国の内政に干渉せず(従前の朝鮮政策は誤っている)、みだりに他の強国と連合をしない。

(五) 独立の実を全うし他国に屈下せず。他国の侮辱を受けて兵力を用いる場合も、国威を損じないよう努める。支那朝鮮への傲慢と欧米への卑屈の態は独立国の体面を失うことと少なくないので、以後は国家の恥を晒さぬよう努める。

以上を国中に公示し、政治法律教育風俗みなこれに依拠して施行するときは、人心一に帰して国家の堅固なること磐石の如くなるべし。

西村の主張が政府と異なるところは、(三) 対外不侵略、(四) 対朝鮮不干渉、(五) 対中朝へは礼に基づく親善、対欧米には毅然とした態度へ是正する——の諸点であり、ことに不侵略国家の原則、対朝鮮・清国政策百八十度転換の主張は「徳治国家」の考えを国際関係にまで発展させる画期的なものであったと言える。

### 三 戦略としての道德—文明国家への道

#### 1 「道德」の再発見

十九世紀の世界史的現実のなかで、西村は対外的独立を確保し得る日本国家像を希求し続けたのであるが、それは前節で検討したように有徳富強な国家であり、その実現には、まず「道德」が国家の基礎として再発見される必要があった。西村が道德を「その範圍に大小の別あり、其小なる者は善く古訓を奉守し、慎んで其一身を修め、務めて其善事を行ふ者を指し、其大なるは万衆を撫育し、国家を安全にし、更に外国に対して国威を宣耀する者を指す<sup>(1)</sup>」と定義した真意もここにあったのである。すなわち道德とは修身から治国平天下までの道を、対象者としては一般民衆から宰相や大臣、一兵卒から將軍までを含むのであり、つまりは臣民それぞれの「道」の体系であった。しかもそれは、幕政時代の道德とは役割が異なり、近代国家としての主体性創出への道なのである。

ここにおいて道德の確立は国民国家としてのアイデンティティを樹立する戦略としての意味を帯び、同時にそれは、西欧の制度や科学を導入し制御する羅針盤として、あるいは翻案し主体化する

るエートスとしても位置づけられていたと言えるだろう。

すでに見たように、明治八年に西村は「修身治国非二途論」を発表し、洋の東西を問わず道徳と政治が一体不可分であることを論じていた。この主張は「日本道徳論」及び「国家道徳論」のなかでは元勲や大臣の醜行批判として、また政策決定と具体的行政における私曲や官僚主義的傾向への批判として展開されたが、西村においては政治・軍事・行政から経済・産業・人心風俗・移民や植民地経営まですべてが道徳と不可分だったのである。

西村は、西欧に対して日本が優位にある、ほとんど唯一の分野を「道徳」に見出していた。<sup>(43)</sup> 日本の道徳は「道理」の力で維持するもので、宗教に依拠する西洋の道徳に勝るといふ認識であった。儒教的道徳の方がキリスト教的道徳よりもむしろ理性的・自覚的であり、他国の侵奪を正当化するような独善性・攻撃性はない、というわけである。この上はオーギュスト・コントをはじめとする西学の力を借りて「東西の教を混合融合し、時勢に適する一の新道徳学」<sup>(44)</sup>をますます精妙にしなければならない。

自由民権運動退潮後の明治二十年代は、国民意識の広範な浸透期であったし、内政的にもナショナリズムの形成が課題であり、西村は道徳をその基盤に据えようとした。外圧に直面しつつ、近代化＝文明化と国民統合＝ナショナリズムの確立を並行して実現しなければならぬと焦慮した西村が、その二つの課題の交差点ところに、「修身道徳」を核心的な倫理哲学として再発見したのだと言えよう。

## 2 シビリゼーションと道徳

西村は、明治前期において政府が文明開化の善き主導者たることを期待していた。しかし、その期待は彼にとって空しいものであった。西村の理解では、西欧諸国といえども、アジア諸国より数段進んでいるとはいえず「文明への途上」にある国々である。「西人曰ふ世界未だ文明開化（シビリゼーション）に達したるの国あらず、皆文明開化に達せんとする道路に在る者なり、惟欧州人は他の国民に比すれば文明開化に近く進みたる者なり」と。<sup>(45)</sup> われわれのゴールも文明開化＝有徳富強なのであるが、それには西洋の今日をそのまま模倣するのでなく、彼らが文明に至った根本と順序をこそ正しく主体的・反省的に学ぶべきなのだ。

しかるに「邦人が今日迄欧米の風を学びたるは、其の誤謬二つあり、其一は欧米人が文明を致したる所以の道を学ばずして、既に文明となりたる後の皮相を学びたるなり、其二は先にすべきことを後にし後にすべきことを先にし、以て本末前後の順序を顛倒したるなり、是を以て欧米の風を学ぶこと二十余年其の文明開化に似たるは唯其の外相のみに止まりて、国力は日に疲弊し人心は日に浮薄に陥りたり」<sup>(46)</sup>。このため政事家は遂にその成功を見ていないのである。

西洋諸国はこの四百年間、野蛮→富強→文明の順序で進歩してきたのである。富強の骨組に文明の装飾を施したのだ。本邦でもまずは富強の国にならなければならない。しかし、その際西村は、西欧の如く他国の侵奪による富強への道を探ることに反対だっ

た。と言うのも、西村の文明観はすでに明六社時代の「西語解(二) 文明開化の<sup>(47)</sup>」において「人民各個の身と社会の全体と并んで、其品位を進めざれば「シウキリゼーション」と名くることが能はず、仮令国民拳て富饒に赴くと雖も、其民の知識少しも進まざる時は、其富饒を得し根原甚不明了にして、其富饒と云ふ者も亦恃むに足らざるなり」と表明されている。このような根本的理解がある故に、西村は、サベージ(野蛮<sup>(48)</sup>)な他国侵奪を伴う西欧諸国の文明を「そのまま」模倣することに反対したのである。

ここまで見た限りでも、西村の「道徳」には、封建社会を基礎づけたそれとは全く異なる意味付けがなされており、「道徳」には明治国民国家Ⅱ文明国家創出への基盤的な役割が託されていたのである。これを別な側面から見れば、西村は西欧哲学を参照して「東洋道徳」の有効性を補完していたとも言える。たとえば彼は、法律は治平の機械にすぎず精神たり得ない。国家社会を汽車汽船に喩えれば道徳は汽力(エネルギー)、法律はシステムであり、法は人の悪を抑止するが善を勧める力はない、ゆえに社会改良に功をなさず、という<sup>(49)</sup>。

さらに儒教道徳を近代世界に位置付け直すについて、西欧思想における分析手法が参照されているのである。明治十三年東京学士会院での講演「性善説」<sup>(50)</sup>において、東洋の性善説が西洋の哲学に比して曖昧であるのは、論ずる主題「性」のデフィニション(定義)が行われていないことによる、と指摘しているが、これは儒学の曖昧性一般への内的批判としても注目すべきものと言えよう。

### 3 伊藤総理へ建言―「夫れ兵は凶器」

明治二十八年一月十三日、清国は日清講和の全権大使として総理衙門大臣張蔭桓、湖南巡撫邵友濂を派遣したが、日本政府が全権委任状不備を理由に交渉を打ち切ったのを見て西村は総理大臣伊藤博文へ建言を行った。その中で彼は次のように言う。

世論は北京占領と充分な償金・割地の要求が大勢であり、民間有志者、両議院議員、著名の者にもそうした主張は多い。しかし其策は大いに事理を誤るものである。今回の戦争は、欧州の諸強国に本邦の畏るべきを感じしめ、武威を世界に示したことだけであらう充分である。「夫兵者凶器、聖人不得已而用之」という。しかも宣戦の勅旨は朝鮮の弱小を助けることであって、決して清国の土地を侵奪するためではなかった。「今回の本邦の戦は義を以て動きたることなれば、亦義を以て賤めざるべからず」。償金の多少、割地の大小などは世界の慣例があるが、少なく取るは可、多く取るは不可である。近日再び講和の使が来たならば「我国威を損せざる限りは、務めて彼の請求を容れ、以て此大戦の局を結ばれんことを願ふ、夫兵猶火、弗戢將自焚、古より戦捷に狃れて、凶禍を被ふりし者古今東西其例甚多し、閣下の固より詳悉せらる、所なるべし、仮令莫大の償金を取り莫大の土地を得るも、国民驕慢の心を生じ、或は奢侈に流れ、或は他国を輕蔑するときは、他日の禍甚畏るべきものあり。況んや欧州人か我邦の戦捷を妬忌し居ることなれば、如何なる所より意外の変起くるも測り難し」<sup>(51)</sup>

下関条約は周知の如く過酷な条件で締結され、西村の望んだ寛

大な方針は採用されなかった。伊藤総理大臣と政府はこの西村の建言に全く耳を貸さなかったし、返書も出さなかった。また西村がその後「他日の禍」を畏れて「不侵略主義」を提起したのは前章で述べた通りである。

西村のこうした徳治国家の志向は、ある時期まで天皇の価値意識と共通していたものではなかったか。『明治天皇紀』は日清戦争の開戦をめぐる天皇の心の揺れを次のように伝える。

「天皇は、日清親善と東洋の平和とを軫念したまふこと最も切なるのみならず、清国と事を構へて、第三国に乗ぜしむるの機会を与へんことを憂慮したまひ、容易に開戦を裁断したまはず」(明治二十七年七月十二日)

「是より先、宣戦の詔を公布せらるゝや、宮内大臣子爵土方久元御前に候し、神宮並に先帝陵の奉告勅使の人選に就きて勅旨を候す、天皇宣はく、其の儀に及ばず、今回の戦争は朕素より本意なり、閣臣等戦争の已むべからざるを奏するに依り、之を許したるのみ、之れを神宮及び先帝に奉告するは朕甚だ苦しむと、久元事の意外なるに驚き、奏して曰く、曩に既に宣戦の詔勅を裁可あらせらるゝ然るに今に於て斯かる御沙汰あらせらるゝは、或は過まりたまふことなきかと極諫す、忽ち逆鱗に触れ、再び謂ふなかれ、朕復た汝を見るを欲せずと宣ふ、久元恐懼して退出し」云々(八月十一日)

今回の戦争は反対だが閣臣等が強く上奏したから仕方なく諾した、とは一国の元首の発言として驚くべきものであるが、この時期の天皇の心中に、日清親善による東洋平和の念、さらには有徳

君主への志向があったのは事実であろう。しかし、天皇はその理念を貫徹し得なかった。そして伊藤総理への建言も結局は無駄であった。

#### 4 人民への接近——指導者意識の転回

道徳を説き国民を導く者＝指導者は、為政者＝行為者への批判力と共に献策力をもつ、知徳兼ねた存在でなければならなかった。西村は言う。指導者とは「凡そ道徳政事法律軍律の如き、自ら之を施行するの權威なしと雖も、其知識に富み道理に通ぜるを以て、是らの諸事を論ずること周詳明備にして、其見る所高く世人の上に出る者あり」という存在であり、他方行為者とは「其身自ら道徳、政事、法律、軍事を施行する權威を有する者にして、其知識と道理とに至りては大に指導者に及ばず否指導者の指導に待ちて初めて、其知識と道理とを得るが如き者多しと雖も、其実行の權威を有するを以て、善悪共に是等の事の世上に行なわるゝは、必ず此人の手を経ざるべからざる者」である。

歴史的な指導者といえば中国では孔子、孟子、あるいは王安石、朱子など、日本では山崎闇斎、伊藤仁斎、熊沢蕃山、新井白石、荻生徂徠、室鳩巢と碩儒が並び、さらに本居宣長と平田篤胤は経世家ではないが国体思想発揚の貢献が大きく、林子平は海外に目を向けさせた先駆的指導者であると言う。西洋ではルソー、ヴォルテール、アダムスミスといった名前を挙げている。

おそらく西村には、竊かに聖代の指導者の一人たらんとの意志があったのであろう。



ところで政府要路の人々は維新の功臣たることにより行為者となったもので、優れた知識によったのではないし、そのうえ日々政務に追われ、深く天下の道理を極める違がない。一方指導者は「其身多く閑散の地に在るを以て或は歴史に徴し地理を按じ、又は輿論を聞き、徐かに其考案を練るを以て、其計画する所或は大に行爲者の思想に勝るあり」。しかるに世の指導者（当然、西村本人を含む）の献言・献策はなかなか伊藤に用いられない。そこで西村は「西洋人の方法」を採用すべしとの重要な結論に至った。ここに、西村の指導者意識の大きな転回が見られる。彼は次のように言う。

西洋の指導者は「其意見を公衆に吐露して一般人民の同意を求むる者多し、人民の多数之に同意するときは行為者も亦之を施行せざることを得ず、仏蘭西のルウソウ、ヴォルテールが自由に民約の説を唱へたるが如き、カールマルクス、セントシモンズが盛んに財産平均、乃ち社会党の主義を唱へたるが如き、共に政府に向ひては一も要求することなく、専ら人民の感情に訴へて全国の民心を風靡せしむるに至れり、是等は共に好例には非ざれども其意見の行なはれんことを欲せば、此途に由らざるべからず」。そして日本の今日の我々も「世の儒者国学者等もし実に其意見の国家の存立に必要なりと見込たらば、己の力限り之を人民に訴へざるべからず、民心既に帰服せば政府独り之を棄置くこと能はざるべし、若し其説く所民心を帰伏せしむるに足らざる者ならば、又政府を服せしめること能はざるは勿論のことなるべし」と。

こうして西村は晩年地方講演を頻繁に行い、直接人民に語りか

け、同時に日本弘道会の支部も全国に拡大して行く。

西村にとつて道徳とは、まさに緊急課題である「国民統合」のための戦略であつたが、それは、現状の国家体制および支配層への服従を直ちに求める御用儒者のそれではなく、西村が最善と考える近代国家ビジョン——まずは有徳な富強国家、そして文明国家への発展を担う国民の叢生を期したものであつた。

#### 四 希望としての帝室

##### 1 「維新の大義」と「新政誹謗」

明治十九年十二月、文部省編輯局長の職にあつた西村が帝国大学講義室で講演した『日本道徳論』は文部大臣森有礼から好評を得、文部省の検定を受けて中学以上の教科参考書にしようという話まで出た。しかし第一章でも触れたように総理大臣伊藤博文は「此書を読み大いに怒り、新政を誹謗し、政事の進路を阻礙する者となし」文部大臣森有礼を詰問し、さらに西村自身も宮内庁内において伊藤から直接「此書物之義に付懇々蒙示論」と著書の真意を問い質されたのである。これ以後西村は伊藤博文からはつきりと政敵一派にみなされた。

西村は、明治八年の侍講兼勤以来、天皇および周辺には厚い信頼を得ていた。翌九年には侍講兼勤を辞退したにもかかわらず宮内省御用掛を命じられて侍講局勤務を続け、天皇に月三回の進講（仏国政典・輿地誌略）を行った。十一年の紀元節翌々日から御座所楼上で始まった「御談会」では、天皇が各親王に参席させ、宮内卿輔・当番侍補・侍従らには陪席させて、月三回の頻度で侍

講らの學術講義を聴き、質疑談話したのであるが、西村は福羽美静・伊地知正治・西周らとともにその席に召されている。<sup>59</sup>十年二月には、翌年の天皇巡幸に先立って東海道・北陸二大学区巡視を行っているが、『明治天皇紀』の「是れより先、学制既に頒布せられ、諸種の学校設立せられ、教育大に進歩して諸科の学芸日に進むと雖も、知識を開き芸術を長ずるに偏し、見を修め徳を樹つるを後にし、或は内外本末の別を忘れて徒に模倣に陥り、教育の大旨に違ふものあり、天皇夙に之れを憂慮したまふ所ありしが、明治十一年北陸東海兩道巡幸に際して、親しく諸学校教育の實際を覽たまふに及び、更に其の感を深くしたまふ」という天皇の憂慮は西村の巡視意見とほとんど同じである。

さらに十五年四月に西村は天皇の命を奉じて皇后に物理学階梯を進講し、十七年には皇后の思召しにより婦女の美跡を編集、二十年に『婦女鑑』が成っている。また十八年に後の大正天皇となる嘉仁親王の御教育世話掛を仰付られ、十九年侍講廃止に伴い宮中顧問官に就任していた。このように西村は長年、明治天皇と皇后の信任を得ていただけでなく、同時に天皇、皇后、皇太子の世界観・社会観・倫理観・政治意識形成に直接的な影響力を行使し得る職務に就いていたのであり、それだけに、伊藤にしてみれば、西村の言動には警戒心を抱いたのである。

明治天皇も伊藤と谷・西村らとの対立には気づいていたと思われる。というのも、明治二十一年七月、天皇は、伊藤に罷免されて閑地にあった谷干城の人物を惜しみ、学習院長に就任するつもりがあるかどうか、侍従長徳大寺實則を通じて宮内大臣土方久元

と枢密顧問官佐々木高行とにわざわざ確認させ、さらに土方久元を通じて伊藤に聖旨を伝え、谷の学習院長事務取扱就任を実現しているが、このとき同時に、西村も華族女学校校長兼務に就任させているのである。<sup>61</sup>こうした天皇の配慮と聖旨のタイミングは、おそらく伊藤と谷・西村らとの対立を踏まえた対応であろう。

西村はその後も、伊藤に忌避されているとは知りつつ、臣民としての責務の自覚をもつて、条約改正問題、内地雑居問題、日清戦争の収束などについて建言を伊藤に呈するが、条約改正反対建言は天皇もこれを閲覧している。こうした西村の言動は、権力者伊藤にとつては、あるいは政治生命損傷の因になるかも知れず、放置できないものであった。明治二十六年十一月、西村は伊藤によつて華族女学校長を解職されるのだが、この間のいきさつについて「往事録」に次のように書き残している。<sup>62</sup>

「宮内大臣土方氏の使として、同秘書官齊藤桃太郎氏来り、宮内大臣の内意を伝へて兼官（華族女学校長）を辞すべしといふ、余は女学校長となりて以来、自ら過失を犯したる事なし、何の故なるかを知らず、是を齊藤に問ふも、同人は使の事なれば其趣意をば知らざるべし、是には何かの子細のあることならん（中略）後任は枢密顧問官細川潤次郎氏に命ぜらる、後学士会院にて細川氏に逢ひ偶然談話此事に及ぶ、細川氏余に謂て曰く、西村の如きは本校長に極めて適當の人なり、是を免ぜしは如何なる故ぞと、大臣答て曰く、彼は嘗て国民協会（大日本協会の誤ならん）に加入し、其発会の席に臨めり、又山梨県に於て演説をなし、大に内地雑居の非なりとせり、是其論旨免官となしたる所以なり」と

ここで西村は、自分は大日本協会に加入したことはなく、また山梨での演説は内地雜居問題に触れてはいない、速記録を見ればすぐわかることだ、と細川に語ったところ、

「細川氏嘆息して去る、蓋し此時伊藤博文氏は内閣総理大臣なれども、其勢力は宮内省を掩ひありしを以て、余の免官は総理大臣の意向に出しことを知る。或人余に語りて曰く、下田歌子華族女学校学監の職を失ひしを以て、西村氏の所為なりと思ひ深く西村氏を怨み、竊に是を伊藤氏に訴へたりと聞く、君の免官は其結果なるべしと」

西村は、その事実如何を知らず、と付記しているが、いずれにして周囲の人々も西村自身も、伊藤が西村を忌避して罷免したのだと理解した。『日本道徳論』以来、西村は維新の大義に抵触する政府中枢―醜行を繰り返す顯官や、国家独立の原則に違背する条約改正方針などへの執拗な批判を繰り返しており、伊藤の言う「新政誹謗」は止むことがなかった。西村―伊藤の対立は、本質的には明治維新の大義をめぐるものであり、「道徳論」を通じて西村が放ち続けたこの執拗な問いは、維新後の世に住む顯官や華族の多くにしてみれば、古証文の気味はあるが、身に覚えのある、急所の棘の如き不快な指摘であつたろう。

## 2 明倫院設立構想

いわゆる欧化政策に性急に傾斜する政府の方針に対し、まず「道徳」をもつて国家の根本を定めるべきことを主張し続けた西村は、その主張を前進させる切り札として、帝室が国民道徳を主導する

構想を抱き、明治二十二年二月土方久元宮内大臣に建議した。<sup>(63)</sup>

建言は、大詔を発して皇室が国民の道徳教育を主導監督することを宣する、というもので、具体的には宮内省内に「明倫院」を設立し、そこで本邦道徳の基礎の論定、実際に施行する方法の考究、全国大・中・小学校に使用する徳育教科書の撰著・検定、府下・府県公私学校の徳育方法の巡視を行うこと――などが建議された。西村は言う。

「事緩なるが如くして甚だ急なる者あり、国民の徳育是なり、従前智徳体の三育を挙げて、悉く文部省に委任ありしも、今に至りて是を見れば、智体の二育は頗る其効あれども、徳育は其効甚だ少きが如し、蓋し従前文部長官の更迭頻繁<sup>(64)</sup>なると、長官の代る毎に其主義を少しく変化あるに由れる者なるべし、今日以後外国との交際益々密なるの時に及び、国民の道徳堅固ならざる時は、皇室の尊嚴を保ち、国家の安全を護すること能はざるの恐あり、謹て本邦の歴史を按ずるに、国民道徳の根元は、常に皇室にあり。故に今日に当りて国民の道徳を維持せんとするには、皇室を措いて他に之を求むべき所なきを信ずるなり、仰ぎ願わくば今日断然と大詔を発せられ、国民の道徳教育は、帝室に於て全く其基礎を定められ、其施行の方行は、他の智体二育と共に之を文部省に委任せらるゝ時は、国民の道徳に於て今日より必ず大に観るべき者あるべし」<sup>(65)</sup>

西村のこの「明倫院」設立建言は容れられなかったが、翌明治二十三年十月に「大詔」は発せられた。『明治天皇紀』は元田永孚と伊藤博文との徳育論争に触れた後に、

「宮中顧問官西村茂樹亦教育界の現状を慨嘆し、徳育の振興に就きて意を用ゐる所ありしが、二十二年二月宮内大臣子爵土方久元に建言して曰く、国民道德の根元は常に皇室に在り」

云々と記し、明倫院については触れていないが、西村の建言を教育勅語「渙発」への導線として位置づけている。教育勅語への西村の関与は今日まで明確にはなっていないが、西村がその成立を欽朴欽舞大いに喜んだことは事実であった。

### 3 教育勅語への期待——私曲牽制から君民同治へ

教育勅語渙発の翌月、西村は國學院開院の式典に列席し次のような演説を行った。

「誠にあれば日本国に取つては此上も無い結構な勅語で、日月の光明のやうなものにて、国民たる者はあれを奉じて守れば決して間違ひはありません。あの日あてがあつても目あてに届くだけのことをしてなければなりません、どの方法を行なつたら間違ひなく目あてに達しられやうかと云ふことを研究しなければなりません」

そのためには儒教、哲学、宗教などから道理に合うものを探るのだと言う。道理とは事実のことで、歴史と経験を基礎に論理的に判断できる教えである、と。

ところで教育勅語は誰に対して渙発されたものか。翌年四月の「教育宗教政党論」で西村はこう語っている。

「此大詔は学校生徒の爲めにのみ発し玉へると思ふ者多きは最も大なる誤りなり、此大詔勅は日本臣民の爲に発し玉へる者に

して、日本臣民と言へば上は総理大臣より下は奴僕の類に至るまで皆其中に包含せり、故に此大詔ありし上は内閣大臣を初め、殊に教育に従事せる文部の官吏地方官学校長大中小学校の教員等は、第一に聖勅を奉じ、其身を謹み其行を改め以て衆庶の模範とならざるべからず、然る後此聖旨に従ひて生徒を教授し以て完全なる日本人民を作らざるべからず」

西村の思想を理解する一つの重要なカギがここにある。それは「此大詔は日本臣民の爲に発し玉へる者にして、日本臣民と言へば上は総理大臣より下は奴僕の類に至るまで皆其中に包含せり」の部分である。「日本道德論」を始点とする国民道德論は、教育勅語を経由して、明治二十年代から第二次大戦の敗戦まで、いわば国民支配の道具として絶大なる威力を奮つたのであるが、西村の意図はむしろ「総理大臣」をも例外とせず、臣民の一人として「其身を謹み其行を改め」ることを迫るものだったのである。そこには、藩閥政府高官の私曲を牽制するという、「儒者西村」の生々しい諫言が表出されていた。そしてやがては、道德的主体としての一般国民が叢生し、為政者や行政官が国家の品性と利益とを裏切らないかどうか監視できる「君民同治」の実現——明治維新の大義の真の実現が期待されていたのである。

### 4 立憲制の核「万世一系」

明治維新の過程で発明あるいは発見され、帝国憲法制定過程で再発見された「万世一系」という歴史認識は、明治政府の下では、廃藩置県や徴兵制や地租徴収その他の基幹的施策を推進するため

に有効に動員された、いわば支配を確実化・効率化する観念として機能した。

一方西村において「万世一系」は、内外の危機に対処する基礎条件としての、国民統合の中核的観念であるとともに、有徳富強の文明国家への希望をはぐくむ中核的理念でもあった。しかも西村はこれを超歴史的原理とは考えず多分に歴史的条件が幸いしたものと認識していた。彼はこう述べている。歴史上、平凡な君主や幼君が数多かつたのに、万世一系の天位が動じなかつたのは、祖宗徳沢の深きにも因るのであるが、だいたいは天皇が「虚器」すなわち至高の地位にありながら実権を伴わなかつたことによるのである。世の尊王家はこの歴史的事実を知らず、古史を読んで藤原氏の専横を責めているが、その認識は誤りである。權威のある所は禍の帰す所であり、皇家は政治権力を持たないほうが良い、と。

西村は歴史的偶然の「万世一系」を、彼の危機意識と国家像のなかで理念化し、「一君万民」の礎石として立憲政体の要に安定させようとしたのであろう。西村にとって、この論理を阻害するものは排除されなければならない。世界主義もキリスト教も、藩閥の私曲も、である。西村は言う。「帝室は固より政治の最上権を領する者なれとも、亦政治の得失に直接の關係を有せず」。英国なども、国王は死せず国王は過を為し得ずという国法がある。「是立憲政体に必要の眼目にして、此主義を失ふときは、帝室も危殆にして、其国も亦危殆なり」。政治の得失を政府の責に帰し、人心に厭がざるときは、首相たる者は其職を辞して他に譲る。こ

れが立憲政体の至美なところである。<sup>(7)</sup>

要するに西村の構想は、天皇を徳の啓蒙天子として国民を教育し、立ち上げた国民主体によって、ともに藩閥政府を監視し、国内的には尊皇愛国の有徳富強国家を、そして国際的には独立不侵略の徳義国家を実現するものであった。こうした西村の考えは、超国家主義から確実に距離を保ったものである。

帝室は西村における文明国家構想の、そしてまた未完の維新達成のための、希望の要であり続けた。

#### むすび―思想家西村茂樹の位置

幕末から明治中後期を生きた史実存としての「儒者西村」の視座を思うとき、丸山真男の次の指摘は示唆に富む。

「幕藩体制が儒教的な原理によって正当化されていたことは諸刃の剣の役割を果たし、やがて幕府や藩の「失政」によって、原理への忠誠は組織の忠誠から剥離されるようになる。尊王論とともに幕末維新の二大潮流の一つとなった「公議輿論」の思想は「天下を公と為す」という伝統観念が、新たな状況と知識の下で次々と意味転換を遂げて行つた過程にほかならない」<sup>(8)</sup>

これは近世儒学思想が、民族的危機の回避という未曾有の課題に直面して、幕藩制イデオロギーの形殻を内破し、ラジカルに転回していった経過の端的な説明となっている。すなわち西村の場合も、儒教的忠誠観念は、当初は幕藩体制へのものであったが、幕末から明治前期にかけて原理への忠誠へと転化し、さらには民族国家へのそれへと転回したと言えるのではないか。

一般的には、日本近世の封建制を支配した儒教イデオロギーが「内憂外患」により破産したことで、近代思想が開かれたという理解がある。儒教の否定は、たとえば明六社における、まさに福沢、西、中村、西村らの「蒙を啓く」論説に見出せるのだ、と。

だが明治啓蒙思想家たちは、近世儒学の到達を基盤として西欧発の近代思想を摂取受容し、その思考方法や論理を「啓蒙」したことも事実である。ここに日本近代思想は、幕末の危機のなかで無効化し否定された幕藩制イデオロギーとしての「形骸化した儒学」からではなく、易姓革命論や天道思想、あるいは実証的傾向や知行合一などの理性的主體的思维が躍動する「儒学ラジカリズム」を媒介して成立し得たのであって、その史的空間に西村茂樹は色彩を放って活動しているのであり、決して「中途半端な」存在ではなかったのである。

従来の見解によれば、西村は「封建社会の原理をふりかざして明治の新社会に挑んだ<sup>(73)</sup>」のであるが、それは「儒者西村」のエートスを捨象した方法ゆえの結像に他ならなかったのではないか。逆説的に言えば、近世において少なくとも幕末期において儒教道徳は厳密な意味で実現し得なかった、と言い得るかも知れない。儒者ラジカルの立場からは、徳川治世の崩壊は儒教的理念の破産ではなく、むしろ未実現のまま形骸化した結果であり、明治維新は彼らの理想、すなわち矛盾なき尊王、一君万民、一点曇りなき徳治の実現を期すものであり、その大義があればこそ幕府崩壊もやむを得ぬものと納得したのであった。また名分論の筋を貫徹した「一君万民」原理は、激しく昂揚していた民衆の「世均し」<sup>(74)</sup> Ⅱ

「世直し」の期待への部分回答でもあったのであり、このような意味においても、帝室Ⅱ天皇はたしかに日本の近代国家・社会形成の重要な結節点なのであった。

明六社の言論活動に始まって『日本道徳論』、『国家道徳論』『続国家道徳論』に至り、そして国民に「尊皇愛国」と「修身道徳」を説いて晩年を生きた「保守的思想家」西村茂樹とは、つまりは伝統的なものが内包する近代国家日本の可能性・道徳立国による文明国家への道を提示した思想家だったのである。

本稿は、平成十三年の財団法人日本弘道会「西村茂樹研究論文」における佳作論文として研究奨励金の交付を受けており、版權は同会に帰属するが、同会のご厚意により本誌掲載が許可されたものです。またこの掲載にあたり一部改稿したことを付記します。

## 註

- (1) 家永三郎「西村茂樹論」『日本近代思想史研究』（東京大学出版会 一九五三年）一三三—一六八ページ。「西村茂樹論」を含む同書の論考が、戦後歴史学が背負った課題、すなわち天皇制ファシズム形成過程と同時に、近代的諸価値の生成過程の解明を意図した重要な成果であったことに変わりはないが、家永が『史学雑誌』に一九五三年の回顧として「占領政策の転換と旧勢力の復活が再び日本史学の前途に暗い影を投影し始めた」と書いたように、この「西村茂樹論」も、当時の危機意識を背景に、尊皇的・国家主義的側面に対し大き

な警戒心を保持しつつ論述されたであろうことに留意しながら、今日その成果を批判・継承すべきであろう。

- (2) たとえば小林利裕『明治前期思想』（三和書房 一九八八年）、王家驊『日本の近代化と儒学』（農山漁村文化協会）一九九八年なども家永説を踏襲している。

- (3) 山田洗『近代日本道德思想史研究』（未來社 一九七二二三四ページ）。この山田の著書には「天皇制イデオロギー批判」という副題が付されているように、「国権—国家主義」への系譜批判が一つのモチベーションとなっている。この意味で西村の道德思想も批判対象なのであるが、ただし山田は西村の主張した「国家主義」の内容にまでは踏み込んでいない。

- (4) D・H・シャイブリー「西村茂樹—近代化についての儒教側の見解」。M・B・ジャンセン編『日本における近代化の問題』（岩波書店一九六八年）二二七—二二八ページ

- (5) 西村は「泊翁扨言」中の「儒者」（『西村茂樹全集』第一巻 六一—六二ページ）で「本邦の道德は儒道を以て起り、儒道を以て維持し、以て千五百年前の人物を造れり、近年国民の道德大に衰へたるを以て、世の儒者道の衰へたるを歎ぜざるはなし、然るに世の中の儒者なる者を見るに、道を以て自ら任ずる者は甚少なく、嗚呼儒道の振はざるは、儒者其責に任ぜざるを得ざるなり」と述べる。本稿における「儒者西村茂樹」の「儒者」とは、「道を以て自ら任ずる」西村自身によって選ばれた存在形態を指す。現支配体制や組織秩

序にはなく、「一君万民」「天下為公」の原理に忠実で、政治家や高官の責務と道德性を常に問い、国家社会の危機に対し諫言・献策を行う「儒者」である。

- 以下『西村茂樹全集』第一巻—第三巻からの引用は『西村全集』I 三三五—三四五ページのように記す。

- (6) 佐久間象山『省齋録』の「君子有五楽」中「東洋道德西洋芸術」は以下に「精粗不遺。表裏兼該。因以澤民物。報国恩。」と続くが、西村が佐久間象山から継承したというのは、単に東洋の精神で西洋の科学技術を取り入れ活用するという態度に留まらず、その目的である、民物に澤し国恩に報ずることを当然含んでいる。むしろ後半の部分こそ西村の道德論のエートスであろう。

- (7) 「安政三年丙辰九月上言時事論策」『西村全集』I 三三三—三四五ページ

- (8) 「建言稿」上冊『西村全集』I 二九六—三二九ページ

- (9) 西村はここで「此万国の内、古来より人の國を侵奪仕候国は、其行貪冒に候間、衰滅可仕之處、却て強勢に相成、自國を守り候国は、不貪無欲に候間、興隆可仕之處、却て衰滅に赴き候」事態は孔孟の教えと矛盾するが、これは天道が貪冒を好み仁柔を惡むということではない、と苦しい弁明を行っているが、ここから儒教的秩序観と万国対峙の現実との不整合を克服する国家像が希求されることになった。

- (10) 「建言稿」中冊『西村全集』I 三六八—三七二ページ

- (11) 家永前掲論文。前掲書一三三ページ

- (12) 「往事録」『西村全集』Ⅲ六四九―六五〇ページ
- (13) 「日本道德論」『西村全集』Ⅰ 八ページ
- (14) 「日本道德論」『西村全集』Ⅰ四八―四九ページ
- (15) 「往事録」『西村全集』Ⅲ六五〇ページ。伊藤博文は西村の『日本道德論』について、農商務相谷干城と呼応して政府方針に異議を唱える企てととっていた。また「伊藤博文関係文書」七の三八九―三九〇ページには、この問題の善後策をめぐる伊藤宛森有礼書簡が収録されている。

- (16) 「建言稿」下冊『西村全集』Ⅰ三九七―四一一ページ
- (17) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 一〇五ページ
- (18) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 一四五ページ
- (19) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ九九ページ
- (20) 「国民訓」『西村全集』Ⅲ 一九五ページ
- (21) 「国民訓」『西村全集』Ⅱ八八二ページ
- (22) 「国民訓」『西村全集』Ⅲ 一九五ページ
- (23) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 一〇一ページ
- (24) 「国民訓」『西村全集』Ⅲ 二四六ページ
- (25) 「国民訓」『西村全集』Ⅲ 二〇七ページ
- (26) 「国民訓」『西村全集』二〇六ページ
- (27) 前掲、家永三郎「日本近代思想史研究」、D・H・シャイプリー「西村茂樹―近代化についての儒教側の見解」、王家驊「日本の近代化と儒学」など。西村の政治思想は、明治時代と『日本道德論』以後とは、ことに民権論を指標として検討するとき、明らかに変質し後退しているとみなされる。

西村茂樹における「文明国家」への道（筑後）

てきたが、国家像や国民像で見る限り本質的な差異は検証できない。彼にしてみれば、民権運動への冷淡は、士族を含め国民の知徳の未だ不十分であることを認識した結果ではなかったか。

- (28) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ一〇一ページ
- (29) 前掲書山田汎「近代日本道德思想史研究」二三四ページ
- (30) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 九九ページ
- (31) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 一一一ページ
- (32) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 一一二ページ
- (33) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 一一三―一一八ページ
- (34) 「続国家道德論」『西村全集』Ⅰ 二五二ページ
- (35) 「世界主義と国家主義」『西村全集』Ⅱ 一〇三八―一〇四二
- (36) 国家主義者の代表にジョージ・ワシントンやフリードリッヒ二世を挙げていること、また西村自身が『続国家道德論』の「国是」において、今日弱肉強食の世界では、国威を落とさないためには武徳を磨励しなければならぬが、「(三) 然れども亦侵略を以て国是とすべからず、他国を侵略するは盗賊なり、海軍の軍備は、唯本国防衛の用のみ供すべし」と言っていることでも明白であろう。
- (37) 津田三蔵は明治二十四年（一九八一）訪日中のロシア皇太子ニコライ二世をサールベルで襲った「大津事件」の犯人。警備中の巡査だった。小山六之助は明治二十八年（一九九五）、



日清戦争講和交渉の清国欽差全權大臣李鴻章を下関に襲った拳銃狙撃犯。明治維新の社会変動が産み落とした、いわゆる士士だった。

(38) 「往事録」『西村全集』Ⅲ 六九八―六九九ページ

(39) 「衰龍の袖の下に隠れ」とは、明治二十六年二月八日、第四議会によって軍艦建造費三三〇万円が削減され、同時に衆議院議長星亨が決議により内閣弾劾上奏文を奉呈すると伊藤内閣は窮地に陥り、内廷費を向こう六年間各年三〇万円省いて軍艦建造費に充当する案を含む「和衷協同」の詔勅を天皇に請うて窮地を凌いだことを指す。

(40) 福沢諭吉は明治二十七年七月二十九日『時事新報』の「日清の戦争は分野の戦争なり」において、幾千の清兵を皆殺しにしたことは、結局「世界の文明進歩の為に其妨害物を排除せんとするに多少の殺風景を演ずるは到底免れざるの数なれば、彼らも不幸にして清国の如き腐敗政府の下に生れたる其運命の拙きを自ら諦むるの外なかる可し」と言い放った。また内村鑑三は『国民の友』二三七号に「日清戦争の目的如何」を書き、この戦いは「支那を覚醒」させる「義戦」と結論した。

(41) 「国家道德論」『西村全集』Ⅰ 九九ページ

(42) 「国家道德論」「統国家道德論」では、国家の道德を「治国平天下の道」と定義し、その論ずる項目には総論・大臣・百問・官制・政務・法律・帝国議會・外交・教育・宗教・軍政・理財・租税・山林治川・民業・航海移民・雑事(以上国

家道德論)、日清戦争・国是・財政・政權及行政官・軍制・帝国議會・外交・民心風俗・物価貿易・教育・台湾(以上「統国家道德論」)など国家社会の問題を網羅している。

(43) 「国民の道德」『西村全集』Ⅱ 二〇六―二一二ページ。

また「日本道德論」には「夫れ西洋人の学問知識氣力智巧固より東洋人に勝れたるに相違なし、然れども其道德風俗習慣生計の事に至りては、東洋の西洋に勝れる者亦少なからず東洋人たる者は務めて其長處を養成して益々其長を現はすべきなるに」云々とある。(『西村全集』Ⅰ四八ページ)

(44) 「日本弘道会創立紀事」『泊翁西村茂樹伝』上三四―四三五ページ

(45) 「文明開化の弁」『西村全集』Ⅱ 四〇―四〇七ページ

(46) 「文明開化の順序」『西村全集』Ⅱ 四〇八―四二八

(47) 「西語解(一) 文明開化の解」『西村全集』Ⅱ 二二―二五ページ

(48) 西村は前掲「西語解(一) 文明開化の解」において、サページ(野蠻)をシヴキリゼーション(文明開化)の対極の概念としている。

(49) 「日本道德論」『西村全集』Ⅰ一六―一七ページ

(50) 「性善説」『西村全集』Ⅱ 六七―七二ページ。西村は「性」をほぼ「心」と同じ物とみて、まず西欧の心理学により心を知(インテレクト)・フィーリング(情)、ウィル(意)、コンセンス(良心)の要素として認識し、この成果を用いて、例えば孟子の性善説では「性」良心」などと分析している。

(51) 「建言稿」下冊『西村全集』Ⅰ 四三六―四三九ページ  
 (52) 西村の危惧は不幸にも的中したと言わばきである。日清戦勝に端を発する大陸政策の展開は、結局、第二次大戦の敗北への端緒となった。

(53) この危惧は三国干渉という現実となった。

(54) 「往事録」『西村全集』Ⅲ 七〇六ページには「国中の志士は其過挙あらんことを恐れ、伊藤陸奥二氏に忠告する者多し、二氏聴かず、余も亦此時一書を伊藤氏に贈りたれとせも、同人より返書も来らず、已に和約の成るの後、両氏甚驕傲の色あり」とある。

(55) 『明治天皇紀』巻八 四五六ページ

(56) 『明治天皇紀』巻八 四八一―四八二ページ

(57) 「指導者と行為者」『西村全集』Ⅱ 六七四―六八三ページ

(58) 『伊藤博文関係文書』七 三八九―三九〇ページ。森有礼から伊藤博文宛書簡、明治（二十）年七月十四日付と二十七日付には、西村茂樹から森有礼宛書簡が三通同封されている。明治二十年七月二十五日付、西村茂樹から森有礼宛書簡は西村が宮内庁で伊藤総理大臣から「右書物之義に付懇々蒙示論候」ことと、『日本道徳論』の出版中断と改正発行のことが、二十七日付書簡は『日本道徳論』発行停止広告のことが伝えられている。森有礼が西村の書簡をわざわざ伊藤博文に回送したのは、伊藤の西村に対する怒りを緩和しようとの意図が働いており、森と西村との関係をうかがわせるもので

西村茂樹における「文明国家」への道（筑後）

ある。

(59) 『明治天皇紀』巻四 三七〇―三七七ページ

(60) 『明治天皇紀』巻七 六七〇―六七六ページ

(61) 『明治天皇紀』巻七 一〇六一―一〇七ページ

(62) 「往事録」『西村全集』Ⅲ 六五四―六五六ページ

(63) 「建言稿」下冊『西村全集』Ⅰ 三九五―三九七ページ

(64) 「従前文部長官の更迭頻繁」とは、西村の文部省出仕以来一六年間で、森没後の臨兼大山巖を含め九人の卿大臣を数えることを指す。

(65) 「往事録」『西村全集』Ⅲ 四三七―四三八

(66) 『明治天皇紀』巻七 六七〇―六七六ページ

(67) 佐々木高行『明治聖上と臣高行』には、佐々木の日記記事に教育勅語案起草者として「勅語の草稿を井上毅へ内命の處、同人は心配にて相断り申し候、夫より学者中の西村茂樹又中村正直其他へも相談相成候處、何れも好案無之、詰る處井上にて荒増の草稿出来」とある（七〇六ページ）。佐々木の記憶どおりだとすれば、西村も教育勅語草案起草になんらかの関わりを持っていたことになる。

(68) 「國學院開院の演説」『西村全集』Ⅱ 五七〇―五七七ページ

ジ

(69) 「教育宗教政党論」『西村全集』Ⅱ 五七七―五九一ページ

(70) 「泊翁扨言」『西村全集』Ⅰ 四六〇

(71) 「泊翁扨言」二七「帝室政府」『西村全集』Ⅰ 四七四ページ

(72) 丸山真男「忠誠と反逆」『丸山真男集』第八卷(岩波書店) 一八八ページ

(73) 前掲家永三郎「西村茂樹論」一四〇ページ

(74) 幕末期の「世直し」一揆に含意されていた、平均の世の中、始原的平等の実現等は、万機公論や四民平等などの政策に整合する側面があった。民衆が王政復古を契機として、旧秩序が顛倒し期待する世が到来したと認識したのも、理念的には全くの誤解ではなかった。